

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」

海外主要オペラ劇場の現状調査、分析比較に基づく、わが国のオペラを
主とした劇場・団体の運営と文化・芸術振興施策のあり方の調査研究

シンポジウム

＝ オペラ劇場運営の現在・オーストリアII ＝

オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方

～ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営

2006年10月1日（日）13：30～16：30

東京国立博物館・平成館内大講堂

講義録

■昭和音楽大学 オペラ研究所■

後援：オーストリア大使館、オーストリア政府観光局

《オープン・リサーチ・センター整備事業について》

昭和音楽大学オペラ研究所では、平成13～17年度の5カ年にわたり、文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業」特別補助を受け、世界の主要オペラ劇場の現状を調査分析し、わが国のオペラ制作と文化・芸術振興策について研究を行いました。また世界の60のオペラ劇場と連携をはかり、オペラ劇場運営に関する最新データの収集と公開に努めています。その一環として開催してきた公開講座では、これまでの15回で、35名にのぼる国内外のオペラ制作をリードするオペラ劇場関係者を招聘し、世界でも類のない試みとして、各界より高い評価を受けています。平成18年4月から、2年間にわたり研究プロジェクトを継続し、日本におけるオペラに関する情報収集・発信拠点として、オペラ研究所のさらなる機能整備と強化を目指し、調査研究を行なっています。

《今回の公開講座について》

新たに始まる講座の第1弾は、オーストリア〈ブレゲンツ音楽祭〉のオペラ監督として采配を振るう、エヴァ・クライニッツ女史をお招きしました。ザルツブルクをはじめ、世界中で無数に行われる音楽祭は近年多様化し、オペラを中心に繰り広げられる大規模な音楽祭は、その経済効果からも、一大観光産業として脚光を浴びています。中でも毎年20万人以上の観客を動員するブレゲンツ音楽祭は、その芸術性の高さ、湖上ステージを駆使して繰り広げられる大スペクタクルにより、オペラ・ファンならずとも足を向けたい場として知られています。音楽祭の今日的あり方のひとつ、〈ブレゲンツ音楽祭〉にみる芸術、娯楽、経済の相乗効果とは。ベルギー王立モネ劇場アーティスティック・プランニング・ディレクターに抜擢され、2006年の秋に就任するクライニッツ女史が、その企画・運営手法を語りました。

● プロジェクト研究者 (50音順) ●

- 五十嵐 喜芳 (昭和音楽大学学長・昭和音楽大学オペラ研究所所長)
石田 麻子 (昭和音楽大学専任講師)
上原 恵美* (京都橋大学文化政策学部教授・滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長・財団法人びわ湖ホール理事長)
大賀 寛 (昭和音楽大学名誉教授・日本オペラ協会総監督)
黒田 恭一* (オーチャードホール・プロデューサー・音楽評論家)
関根 礼子 (昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員・音楽評論家)
武瀧 京子 (昭和音楽大学助教授)
寺倉 正太郎 (音楽評論家)
中山 欽吾 ((財)東京二期会常務理事)
永竹 由幸 (前昭和音楽大学音楽学部教授)
野村 三郎* (早稲田大学講師・音楽評論家)
広渡 勲 (昭和音楽大学教授)
古橋 祐 (昭和音楽大学助教授)
堀内 修 (音楽評論家)
美山 良夫 (慶應義塾大学教授)
山崎 裕視 (昭和音楽大学講師)
渡辺 裕* (東京大学大学院教授)
渡辺 通弘 (昭和音楽大学名誉教授)

*は平成18年度からの新規加入研究者

シンポジウム

＝オペラ劇場運営の現在・オーストリアⅡ＝

オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方

～ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営

講師 エヴァ・クライニッツ (ブレゲンツ音楽祭オペラ監督)
Eva Kleinitz / Bregenz Festival, Director of Opera

第Ⅰ部 基調講演「今日のオペラ・フェスティバルの運営手法
～ブレゲンツ音楽祭をめぐるって」

第Ⅱ部 パネル・ディスカッション

冒頭挨拶 広渡 勲 (昭和音楽大学教授)

パネリスト 黒田 恭一 (オーチャード・ホール・プロデューサー、音楽評論家)
寺倉正太郎 (音楽評論家)

モデレーター 石田 麻子 (昭和音楽大学専任講師)

通訳 岡本 和子 (慶應義塾大学講師)

総司会 武濤 京子 (昭和音楽大学助教授)

目次

講義録編

第Ⅰ部 基調講演	5
「今日のオペラ・フェスティバルの運営手法～ブレゲンツ音楽祭をめぐって」	
第Ⅱ部 パネル・ディスカッション	25

資料編

講演概要	43
世界のオペラ・フェスティバル	46
ブレゲンツ音楽祭のオペラ公演 1994～2006年	48
ブレゲンツ音楽祭で1シーズンに行われる公演	52
ブレゲンツ音楽祭、湖上ステージの座席表	54
出演者プロフィール	57

第 I 部

基調講演

「今日のオペラ・フェスティバルの運営手法
～ブレゲンツ音楽祭をめぐって」

【司会】 皆さん、こんにちは。本日は、文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」シンポジウムへ、ようこそお越しくださいました。

まず最初に、昭和音楽大学の教授、そしてこの整備事業プロジェクトの総括責任者・広渡勲からごあいさつをさせていただきます。

【広渡】 こんにちは、広渡です。

第1次公開講座の最終回が、この会場で、講師はパリ・オペラ座のジェラルール・モルティエGerard Mortier総裁でした。おかげさまで、皆様方のご声援をいただいて、さらに2年間にわたり、第2次の公開講座を開催することができるようになりました。きょうがその第1回目です。

私は、大学の夏休みを利用して、ここ4年間、ヨーロッパの音楽祭を見てまいりました。バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、グラインドボーン音楽祭をはじめ、ヨーロッパの音楽祭は今、非常に活況を呈しています。どこもチケットが取れないような状況が続いています。バイロイトは何年か待ちですし、ザルツブルクは、チケット代が何と420ユーロ、6万円を超えています。演目によっては、例えば、ことしの《フィガロの結婚》の初日のチケットは1万ユーロ、日本円にして百何十万円というダフ屋が出たという話が出ているぐらいに、多くの話題を集めています。そういうオペラ・フェスティバルについて、その経済効果と地域との連携、その都市の観光政策と、どう上手く、かつ芸術性を保ちながら運営していくかということを考えているうちに、一夏に20万人の観客を動員するという非常にユニークなフェスティバルが、オーストリアのブレゲンツにあることがわかりました。お客様の中にも何人かは映像でごらんになったり、実際に足をお運びになった方もいらっしゃると思います。この第1回目は「オペラ・フェスティバル」というテーマで、このブレゲンツの音楽祭が、スペクタクル性と、娯楽性と、その中でいかに芸術性を保っているか、その経済効果にスポットライトを当てることに致しました。

実は、そのブレゲンツ・フェスティバルについて、お話いただける、最もふさわしい方がたまたま来日中だということがわかりましたので、きょうはそのオペラ監督エヴァ・クライニッツさんに、ブレゲンツ・フェスティバルの運営について第I部で詳しくお話をさせていただこうと思っております。

休憩を挟みまして、第II部は、エヴァさんを中心に、長い間観客の立場とその視線で音楽評論を続けてこられた黒田恭一先生と、オーストリアやドイツのオペラ界に大変詳しいオペラ研究家の寺倉正太郎氏のお2人に加わっていただき、また皆様からのご質問なども

受けながら、お話をさせていただこうと思います。

通訳は岡本和子さんです。それでは、エヴァさん、よろしくお願いします。

【司会】 それでは、お待たせいたしました。「オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方〜ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営」というタイトルで基調講演をいただきます。講師はエヴァ・クライニッツさん、ブレゲンツ音楽祭のオペラ監督です。そして、通訳は慶應義塾大学の講師・岡本和子さんをお願いいたします。

【クライニッツ】 こんにちは、エヴァ・クライニッツです。ドイツから来ました、オーストリアで仕事をしています。きょうはこれからオペラ音楽祭について話します。広渡先生、きょうはこのような機会をありがとうございました（以上、日本語で）。

本日は、音楽祭、フェスティバルについてお話をしたいと思います。特にブレゲンツ音楽祭について、そうしたフェスティバル、今日におけるフェスティバルのあり方、そして、特にこれは日本の方々にとって大変興味深いと思われる共同制作などについてお話ししたいと思います。

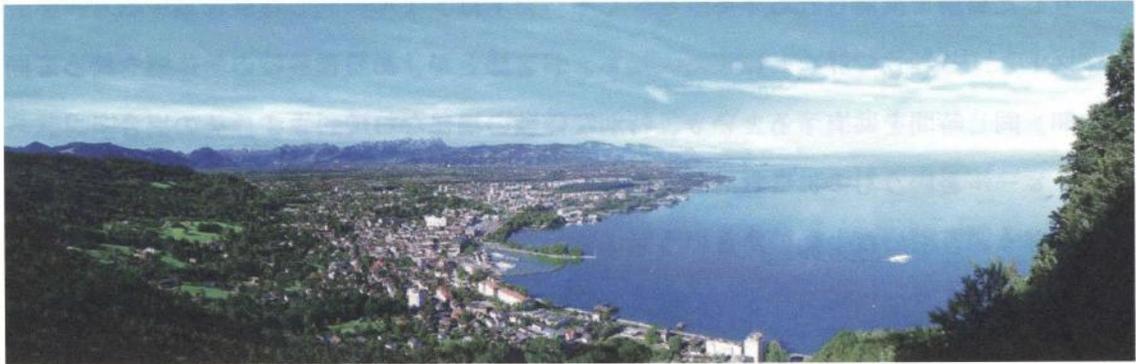
まずフェスティバルとは何か、また、今ヨーロッパでなぜこれだけ各地でフェスティバルがあちこちで誕生しているのか。ヨーロッパではよく、特に夏の時期になると、どのお城でも、またどの小屋でも納屋でも音楽祭を開いていると言われるくらい、あちこちでフェスティバルが開かれています。

さて、人はなぜこうしたフェスティバルを求めるのかということ考えた場合、いろいろな理由が頭に浮かぶかと思います。例えば、日ごろの日常生活を離れて、ちょっと非現実的で非日常的な空間に身を投じたいという人の欲望、旅に出たいという人の欲望、それから、そうした音楽祭、フェスティバルが開かれるそれぞれの街を統治している政治家、自治体等の関係者の方たちが、そうした自分たちの村で、自分たちの街でフェスティバルを開くことによって、この街をより知名度を上げていくという、いろいろな経済面などでの、また政治面などでのメリットとが、その裏には考えられるかと思います。

さて、こうしたフェスティバルを立ち上げる際、幾つか重要な点が挙げられます。

まず1つ、フェスティバルにとって大事なものは、そこが、人が繰り返し来たいと思える場所、人が集まる場所にならなければいけないということです。特別な場所という点で、その環境の1つとして挙げられるのが自然の美しさです。すてきなお城があつたり、また、自然が美しかったり、とてもすてきなパノラマ、景色が会場の裏で広がっていたりといったことです。特に夏ですと、そうした自然やお城などを背景にお芝居やジングシュピール

を演じたりすることがあります。その代表的な例が、フィンランドのサヴォンリンナ音楽祭であり、またイギリスのグラインドボーン音楽祭なのではないかと思います。



ブレゲンツの街の風景

こうした美しい自然という1つの条件をブレゲンツ音楽祭も兼ね備えています。そして、もう1つ、例えば、パイロイト音楽祭のように、人を引きつける1人の作曲家がそこで生まれたとか、あるいはそこで長く活躍したといった点が、もう1つの可能性として挙げられます。例えば、ザルツブルクなども、特別な歴史的背景を持った場所ということで、多くの人を魅了してやまない地です。

そして、もう1つ、これはフェストシュピールFestspielではなくて、フェストターゲFesttageとドイツ語で言われるもので、これは同じ「芸術祭」というように日本語では訳されますが、通常デイリーに音楽を演奏しているホールや、オペラハウスなどがあつたとして、そこで期間を限定して、集中して1つのテーマ、あるいは1人の作曲家をテーマとして取り上げて、それまでレパートリーで演奏してきたさまざまな作品を、集中して短期間の中でもう一度、いわゆるキャスティングをよりランクアップさせて上演していくというものもあります。例えば、ドレスデンのリヒャルト・シュトラウス音楽祭です。また、チューリヒなどでも、通常デイリーに使われている劇場が集中して、音楽祭の場所として使われています。

こうした通常デイリーで使われている劇場における音楽祭、また、一定の期間でしか使われない会場を使つての音楽祭、いずれにしても音楽祭、フェストシュピールと名前がつくものには、必ず期間が限定されているという条件があります。これは1週間であったり、2週間であったり、最長で大体5週間くらいまでというのが音楽祭、フェスティバルだと思いますが、そこでは「集中して」ということがキーワードになります。お客様たちは集中してたくさんのお芝居を観たり、たくさんの演奏会やオペラを聴いたりします。そし

て、その集中する形で、1カ所に芸術家がたくさん集まるのもフェスティバルの特徴です。芸術家はそこの1カ所に集中して短期間集まって、仕事をしていくわけです。

こうした場所で演奏されるオペラないしイベントは、1つの同じ体験を集中して、アーティストと、そこまで旅をしに来た人たち、お客様とが、ある種独特の一体感を持って同じ空間、同じ時間を共有するという、特別な体験の場になっています。その場合、フェストシュピールというもの、これも音楽祭ないし芸術祭と訳されますが、それが、もともとは一体どういうものだったのかという話にまで、このテーマは発展させていくことができます。

フェストシュピールはもともと古代ギリシャにまでさかのぼるもので、巡礼的な要素、儀式的な要素が大変強く、古代ギリシャでは、特に屋外で集中して、いろいろな催し物が行われていた時期があったわけで、これがフェストシュピールのもとになっています。ですから、どこか儀式的な要素、非日常的な要素が必ず含まれています。

こうした音楽祭になくしてはならないのは特別な場所であり、そこで上演されるものが上質でなければいけないのも、非常に重要なポイントだと思います。これは、どんなに小さな音楽祭であっても、大きな音楽祭であっても、この2つの条件は必須条件ではないかと思われま

す。そして、もう1つ大事なのが、そうした上質な上演、公演、イベント、これを可能にするための芸術面でのパートナーが必ず必要だということです。例えば、ザルツブルク音楽祭の場合はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、グラインドボーン音楽祭の場合はロンドン・フィルハーモニー管弦楽団が重要なパートナーになっているわけです。それぞれのオーケストラと音楽祭との結びつきは、もう40年を超える長い関係、深い関係になっています。その一方で、音楽祭だけのために新しくアンサンブルが設置されることもあります。これは、そこでしか聴けないというオーケストラのアンサンブルで、その一例が、クラウディオ・アバドClaudio Abbadoを中心につくられたルツェルン祝祭管弦楽団Lucerne Festival Orchestraです。これは指揮者アバドの理想とする、大変水準の高い演奏を実現するために、音楽祭という枠の中で、わざわざ新しくつくられたオーケストラです。

また、音楽祭、フェスティバルを実現するには環境が大変大事だとお話ししましたが、そうした環境をフェスティバルのために利用するだけではなくて、その現場である自治体、現場の人たち、周辺に住んでいる人たち全員と一緒にパートナーとして、それぞれの芸術イベントに参加してもらい、参加させるという、この地元との一体感が次の重要なポ

イントになってくると思います。例えば、イギリスのグラインドボーン音楽祭も、また、グレインジ・パーク・フェスティバルGrange Park Operaにしても、地元の間が非常に積極的な形でそれぞれのフェスティバルに参加しています。例えば、宿を提供するなど、さまざまな形でサービスを提供してくれています。地元の人たちが一緒に協力してくれる、一緒に楽しんでくれる雰囲気は、それぞれのフェスティバルに出演するアーティストたちにとっても、とても重要なことです。こうしたフェスティバルは、大抵がロンドンや東京、ニューヨークといった大きな都市ではなくて、小さな村や小さな街で開かれることがほとんどです。そうした、ふだん住み慣れない、また、ときには行ったことのない、そういったところで、非常に集中して長い時間仕事をするためには、そうした迎える側の環境も、アーティストにとって、とても大事だと思います。

そうしたアーティスト、どれだけ素晴らしいアーティストを呼べるかは、予算との兼ね合いの問題も出てくるわけですが、アーティストにとって大変心地よい居場所でなければいけないというのが1つ。そして、もちろん音楽祭に来てくださるお客様にとっても、また来たい、長い間そこに滞在したいと思える心地のいい居場所になっていなければいけません。フェスティバル・サイドとしては、そうした「巡礼地」とも言えるフェスティバルの地に足を運んでくださる方々のために、すべての年齢層、階級層の方々を満足させることができる、そうしたある意味、民主的なプログラミングが求められているのではないかと思います。これは子供なども十分に楽しめる、また若い人たちも大人も楽しめる、そういう音楽祭でなければいけないと思います。

そして、ここで話をオーストリアに持っていきましょう。オーストリアという国では、その音楽シーンを長い間彩ってきた、たくさんの作曲家たちが活動しました。モーツァルトに始まり、ハイドン、それ以降の作曲家みんながこの国の音楽の歴史をつくってきたことを、国民全員が大変意識している。とても作曲家を愛し、尊敬している国なのです。ドイツ人である私は、オーストリアで仕事をしていて、このことを非常に強く感じました。

例えば、オーストリアならではの非常に象徴的なことがあります。オーストリアでは10月1日に議会選挙が行われますが——明日です。この10月1日の議会選挙と同時に、日を同じくして、お芝居をやる劇場のブルク劇場Burgtheaterの新しい総裁が決まる。この選挙、議会選挙と劇場の総裁の選挙というのが、同じ関心度をもってウィーンの人たち、オーストリアの人たちの間で語られているという、そうした非常に芸術に対する尊敬の念と、関心度の高い国だと思います。

さて、このブレゲンツという土地は、地理的に見て、ウィーンから大体800キロ離れたところにあるオーストリアの地方都市です。州で言うと、フォアアールベルクVorarlbergにある街です。このフォアアールベルク州というのは、地理的に見まして、首都であるウィーンよりもスイスのほうが近いところです。アールベルクという山があって、その手前にあるからフォアアールベルクという名前がついている州です。スイスがあって、そしてフォアアールベルクがあって、山があって、そしてウィーンのほうにずっと平らになっていくという地形で、ウィーンとブレゲンツの間を隔てている距離は、精神的な距離だけを考えますと、ちょうどブレゲンツとパリくらいの遠さがあります。ですから、国の中央としてのウィーンからは離れている場所です。

このブレゲンツ・フェスティバルが始まったのは、第2次世界大戦、つまり終戦の1年後、1946年です。この46年当時は、ブレゲンツの地にまだ多くの連合軍のフランス軍兵士が駐留していた時期で、ブレゲンツにいたフランス軍の兵士たちと、それから、戦争難民の人たち、避難してきた人たち、そして、ウィーンを離れてブレゲンツの地に疎開していたたくさんの芸術家たちが集まって、何か音楽週間ができないかと考え始めました。ちょうどその46年から、ウィーン交響楽団が夏の活動の場所としてブレゲンツを選んでいて、ブレゲンツで何かオーケストラのコンサートができないかと考えていた時期だったので、非常にそれがうまいぐあいに重なって、1週間にわたる芸術・スポーツ週間が、この46年にスタートしました。

この46年、最初に何が上演されたかという点、今、画像でごらんになっている湖上ステージがあるところから、ちょうど60メートルほど手前に、小さな船着き場があり、そこに大きな船を2隻並べて、片方の船にお客さんを乗せ、手前の船でモーツァルトのオペラ《バスティアンとバスティエヌ》を上演したのがブレゲンツのオペラ・フェスティバルの最初です。このお客様は船に乗り込むときに、それぞれ自宅から持ってきた椅子を持ち込んで座り、公演を観ました。そういったオペラの上演と並行して、ウィーン交響楽団がブレゲンツ市内にある大小さまざまな会場で音楽会を開いていました。

こうしてブレゲンツ・フェスティバルが始まってからほぼ4年後に、この湖上特設ステージがつけられました。そしてこうした大がかりなものをつくると、いろいろな注目を浴びるようになって、何かこのブレゲンツ・フェスティバルにふさわしい屋根付きの小屋を1つつくろうではないかという話になり、ブレゲンツのフェストシュピールハウスが建設され、79年から80年のシーズンに、1,800席を持つフェストシュピールハウス

がオープンしました。

当初から、この湖上ステージの上ではオペラ、バレエ、そしてコンサートが上演され、新しくできたフェストシュピールハウスのほうでは、ベルカント・オペラなどが上演されてきました。そして、もう1つ重要な点は、この湖上ステージは雨が降ると使えなくなりますので、その場合、この湖上ステージの舞台、同じ催し物を、そのまま屋根のあるフェストシュピールハウスで上演するというふうに、両方の会場が使われています。

この音楽祭には1983年から2003年までの間に、インテンダント（総裁）を務めたアルフレッド・ウォップマンAlfred Wopmannという人がいましたが、この人がいわゆる今の形のブレゲンツ・フェスティヴァルをつくり上げた生みの親とされています。フェスティヴァルを拡張し、いろいろな意味で内容を充実させていった人物です。

そして、現ブレゲンツ・フェスティヴァルのインテンダントのポジションにいるデイヴィッド・パウントニーDavid Pountneyを初めてブレゲンツに呼んだのも、このアルフレッド・ウォップマンでした。ウォップマンさんは、80年代からもう既にパウントニーを演出家としてブレゲンツ音楽祭に定期的に招聘しています。そうした長いフェスティヴァルとの関係を通じて、非常に自然な形でウォップマンの後継者として、2003年からデイヴィッド・パウントニーがブレゲンツ音楽祭のインテンダントになりました。

さて、ブレゲンツ音楽祭の特徴をもう一度まとめると、まず美しい自然があつて、その中に湖があり、この湖を活用した音楽祭であるということ。それから、固定したパートナーとして、ウィーン交響楽団がこの音楽祭のメイン・オーケストラとして機能しているということ。そして、ブレゲンツならではのステージが、湖の上にできたステージで、これが目玉商品ということになります。

その一方で、ブレゲンツは、人口2万8,000人という小さな街ですが、そこで音楽祭の間に使われる会場の総座席数は1万2,000席あります。次は、この1万2,000席をどう配分して使っているかという話を続けていきたいと思います。



上演中の《ラ・ボエーム》の舞台

©Karl Forster

一番の目玉のステージが、湖の上につくられたステージです。これは1シーズンで26公演から28公演を上演し、そして、一晩で6,700人が入る、座席数6,700というステージで、その夏の間、大体17万人近くの人がこれを観ることになります。毎晩、1つ1つの公演が特別なイベントとなる、そういう特別なステージだと私は思っております。これは2年間で作品と演出を変えていくシステムで、2年かかって、このステージをつくり上げる、それだけ大がかりなステージになります。それと同時に、2年間通して舞台を使わないと元手が取れない、それだけコストのかかるステージでもあります。

このステージを見て、オーケストラは一体どこに座って演奏しているだろうと疑問を持たれる方も多いかと思います。実は、この舞台で、まず歌手は当然ながら、この湖上ステージの上で演じ、歌うわけですが、それだけでは声が届かないので、PA (Public Address) を使います。PAを使って歌手の声を客席に届ける。そしてつい最近まで、オーケストラもこのステージの一面、湖上舞台にピットがあって、そこに入って演奏していましたが、音があまりよくないという理由等で、数年前からちょうど客席の後ろにある客席1,800の建物、フェストシュピールハウスでオーケストラが演奏する音が、やはりPAを使って客席に届けられ、音響的にはそのほうがオーケストラの音も美しく響くということもわかりました。



舞台の後方、岸側にフェストシュピールハウスが建つ

ここで使われているPA技術は、歌手の声を1点から拾い上げるだけでなく、歌手や演奏者とともに、すべてこの会場全体に音が広がり、そして歌手が動くと、その動きに伴って音を発信する地点が変わっていく、方向性を持った音の出し方になっています。音響技師としてずっとブレゲンツ・フェスティバルで仕事をしてきているのが、ウィーン国立歌劇場の音響のチーフで、これがヴォルフガング・フリッツWolfgang Fritzさんという方です。彼がブレゲンツで毎年夏、技術、音響を担当してくれています。

そして、もう1つ、2007年から実際に使われることになったのが、ブレゲンツ・オープンエア・アコースティックBregenz Open-air Acoustic、BOAと略されるブレゲンツならではの新しく開発された音響技術で、これが2007年の《トスカ》の舞台から使われることになっています。

さて、歌手がどうやっていろいろ多方面から響いている音をキャッチできるかということですが、まず歌手は指揮者の姿を見るために、モニター越しに指揮者を見ます。これは会場のステージのいろいろな場所に隠しモニターが設置してあり、そのモニターを通じて、指揮者の棒を見ることができます。そして、耳に小さなモニターできる、オーケストラの音をキャッチするイヤホンを入れていまして、これでフェストシュピールハウスで演奏しているオーケストラの音を直に耳でキャッチすることができます。そして、その一方、ソリストの歌手のほかに合唱がありますが、彼らは舞台上で生の声でPAなしで歌っているグループと、オーケストラと同じ場所で歌うグループと、二手に分かれて合唱の声が出てきます。生の合唱、それからPAを使った違う場所で歌っている合唱と、両方の声が舞台上で1つにミックスされて、お客さんに届けられるという形です。

ウィーン交響楽団は、1946年、フェストシュピールのスタートのときから一緒に仕

事をしているパートナーのオーケストラで、合唱も46年から一緒に仕事をしているブレゲンツ・フェスティバル合唱団です。これは地元の合唱団で、1年間練習をして、夏に歌う、本番を迎えるという合唱団です。これはアマチュアの合唱団で、地元の人たち、学生、それから何人かプロの歌手がいても、ほとんどがアマチュアで構成されていて、これが冒頭お話ししました地域参加型の音楽祭、フェストシュピールという性格をしっかりと保っている1つのポイントです。

ご紹介した湖上ステージは、当然ながら、客席数が非常に多いこともあり、今、最もブレゲンツ・フェスティバルにお金をもたらし、潤わせてくれる会場です。そこで入ってきたお金、得られたお金を使って、チケットが売りづらいような公演などにも利益を配分しています。客席1,800前後のフェストシュピールハウスで上演される作品、オペラにそうしたタイプのもが多く、ちょうど83年から84年ぐらいの時期、ウォップマン総裁のもとで、そうした、非常にすばらしい作品だけでも、あまり今まで上演、注目されてこなかった作品を積極的に取り上げるようになりました。会場は、フェストシュピールハウスが使われています。

そのリストは皆様のお手元にありますが、幾つか例を挙げるならば、ロイヤル・オペラ・ハウス・コヴェント・ガーデンなどに、その後プロダクションとして持っていき、賞もいただいたマルティヌーの《ギリシャの受難劇》、ヤナーチェクの《利口な女狐の物語》など、また、今度2007年にはブリテンの《ヴェニスに死す》、そうしたものを、このフェストシュピールハウスで上演しています。

そして、もう1つ、3本目のフェスティバルの柱となっている会場が、コルンマルクトテアターKornmarkttheaterという劇場です。こちらは、フェスティバルがスタートした46年当初は、比較的会場として頻繁に使われていましたが、その後一時、あまり使われなくなった時期があり、主に年間通じて、地元の戯曲、お芝居の劇場として細々と使われていましたが、2003年以降、こちらの会場を使って、ブレゲンツ・フェスティバルではオペレッタを上演するようになっております。ここでもやはり、珍しいオペレッタを取り上げるようにしていて、クルト・ヴァイルのオペレッタやオッフエンバックの《青ひげ》といった、あまりみられない作品を上演しています。

ここで上演される作品は、多くが共同制作の形をとったプロダクションです。ブレゲンツの場合、湖上ステージで得られる収益、その一部をすべてのほかのホールの制作費に回さなければいけないので金銭的にも大変きつく、国内外のほかのステージとのいろいろな

共同制作の形をとることが大変多くなっています。

このコルンマルクトテアターで上演されるオペレッタは、フォアアールベルク州にあるフォアアールベルク州立交響楽団という地元のオーケストラを中心的に使っていて、地元の合唱団もここで使うようにしています。

ここで上演された作品は、イギリスなどにその後持っていったり、ことしのプロダクションなどはフォルクスオーパーで再演されることになっています。

フェスティバルの次の重要なポイントですけれども、やはり今の時代に生きているアーティストたち、現代のクリエイターたちの作品を見せる、また聴かせる場が、必ずなくてはならないと考えています。現代のアーティストが、室内楽からバレエ、お芝居、戯曲、オペラ、コンサート、いろいろなジャンルすべてを包括した現代作品を上演する場所として、ブレゲンツのいろいろな会場が使われています。

そのうちの1つが、ヴェルクシュタットビューネWerkstattbühneです。ヴェルクシュタットとは、ドイツ語で「工房」という意味ですが、「工房ステージ」と呼ばれるこの会場は、現代の作品、現代物を上演する場所として使われ、広さはちょうど民間航空機が1機入るくらいの倉庫のようなところ。そこは客席は200人の座席で観ることもできるし、2,000人の座席を入れることも可能で、非常に柔軟に客席を変えることができる空間です。

このヴェルクシュタットビューネという空間は、もともとコンサート会場やイベント、こうした公演を上演する会場のためにつくったわけではなく、湖上ステージで上演される作品の練習、リハーサル会場としての必要性が出てきたことから確保されました。

このヴェルクシュタットビューネという空間は、ある実際の苦い経験をもとにできました。実は93年のブレゲンツ・フェスティバルの湖上ステージで《ナブッコ》が上演されたのですが、この《ナブッコ》のステージを準備している最中、つまりリハーサル期間中、ずっと雨にたたられて、初日を迎えてもなお、歌手たちが通しでこの《ナブッコ》を全部歌いきれなかったことがありました。そうした苦い経験をもとに、何か湖上ステージと同じくらいの舞台の広さを確保できる1つの空間が必要だということで、このヴェルクシュタットビューネが新しくつくられ、97年から98年のシーズンに完成し、今でも雨の日はここでリハーサルが行われ、そしてリハーサルが終わった段階で、今度は現代物を上演するために、フェストシュピールの間中、使われています。

そして、こうした現代物を上演する空間としては、2つ小さめの会場があります。1つ

は、座席数約500席の「Shed⁸」という空間で、主にお芝居、戯曲が上演されています。そしてもう1つ、クンストハウス・ブレゲンツKunsthaus Bregenzという美術館の1フロアを使って、そこで展示されている作品と関連性を持つ音楽、現代曲などが演奏されています。

さて、こういうフェスティバルの場合、大きなポイントになるのが当然予算であるわけです。この予算の配分については、まずフェストシュピールの運営で、このフェストシュピールを運営するのは公益法人の立場をとる組織です。そのトップには、2人のCEO (Chief Executive Officer)、つまり最高経営者がいて、1人は芸術的な面のトップで芸術監督、もう1人は財務関係を担当するトップです。

また、この予算については、年間の予算が大体2,500万ユーロという規模です。この2,500万ユーロ(37億5,000万円)のうち、大体550万、全予算の約5分の1が、国、自治体等からの助成金です。全予算の5分の1が自治体また国等からの助成金で、その配分は、まずブレゲンツ市が25%、フォアアールベルク州が35%、そして、オーストリア連邦共和国の国のレベルで40%で、この550万ユーロ(8億2,500万円)の助成金が配分されています。25、35、40というこの配分は、毎年変わりません。その一方で、プライベートなスポンサーたちがいて、このスポンサーたちがつくっている理事会が、そのほかの形でお金をかき集めてきてくれます。

国という重要なスポンサーがあり、そのほかに民間のスポンサーがいるわけですが、この民間スポンサーの母体が、ブレゲンツ・フェスティバル友の会というものです。46年にこのフェスティバルが始まった当時は、ここが運営の中心母体で、今これは1つの財団の形をとっています。ブレゲンツ・フェスティバル友の会財団というもので、この財団のトップに、ギュンター・ロンベルク(Günter Rhomberg)が、理事長として務めています。このロンベルク理事長が、いわゆる地元、それからまた国内外の財界とのコネクションを持っている方で、彼がいろいろな方面からのスポンサー、お金を集めてきてくれます。その財団の果たす役割は、予算面で言うと、国や自治体が我々に対して払ってくれる助成金とほぼ同額に等しい金額を、毎年集めてきてくれます。

さて、こうしたフェスティバルを立ち上げ、運営していく上で、どうしても一度は考えなければいけないのが、自治体に対してどれだけの経済的なメリットがこうしたフェスティバルにあるのか、ということではないかと思います。ブレゲンツ・フェスティバルは、ウィーンの経済研究所にその研究を委託して、ブレゲンツ・フェスティバルが間

接的な形でどれだけブレゲンツ及びフォアアールベルク州に経済的なメリットをもたらしているのかを計算してもらいました。もちろん、こうした研究で数字が出たからと言って、国からの助成金が増えることはないですが、こうしたことは、一つ一つ研究として調べておくべきではないかと思います。

そして、こうした間接的な経済面でのメリットとして、2,500万の収益がこのフェスティバルで入ってきたとすると、約1億ユーロ（150億円）の間接的なお金が国や自治体に入る計算が出ました。つまり、1ユーロをフェスティバルで稼ぐことができれば、4ユーロが国に入る計算になります。1:4くらいの数字になります。また国と言っても、ブレゲンツやオーストリアだけではなく、隣接しているドイツやスイスでの経済的効果もあることが立証されています。なぜなら、観光客がブレゲンツのほうに音楽祭に来るときに、そういったドイツやスイスなども通過してくることもありますし、また、ドイツやスイスなどにブレゲンツのほうから行く人たちもいるわけで、フェスティバルは隣接するすべての自治体、国境を越えたすべての自治体に経済的なメリットをもたらすことができることがわかっています。

こうした音楽祭を通して、当然、地元の音楽家たちを雇用する場が生まれる。また、地元の合唱団もそこで仕事を得ることができる。音楽家や芸術家だけではなく、地元のホテル産業も、お客さんが来るから潤う。そして飲食業界も、フェスティバルによって、新しい雇用が生み出される。さまざまなインフラ面でも多数の雇用を、このフェスティバルが間接的に生み出しているわけです。

また、このフェスティバルは、ソフト面ではブレゲンツという地方都市を世界的に知らしめる、街の知名度を上げることに、大きく役立っています。それを役立てる人たちがたくさんいます。スポンサーたちも、ブレゲンツ音楽祭にお客さんを連れて行って、そこで舞台を見せて、ブレゲンツの街で商談をしたり、政治家たちも、ブレゲンツの街の知名度が上がってくれば、当然ながら、特にフェスティバルが開かれているシーズンに、そこで非公式な首脳会談を開いたりしています。

これは有名な話で、ザルツブルクとブレゲンツの音楽祭には、必ずオープニングにオーストリアの大統領が出席しています。ことしのブレゲンツは、オーストリア大統領とアイルランド首相が招待されて、ふたりの会談がフェストシュピールの期間中に行われました。

さて、フェスティバルにいらっしゃるお客さんの内訳は、国籍でいうと、大体60%がドイツからのお客さんです。これは圧倒的な数字です。オーストリア人は25%です。

スイスからが10%。そして、そのほか5%は、イギリス、イタリア、またフランス、そして、最近では日本からも観光客の方がたくさんお見えです。

ほかに、これはプレゲンツにいらっしゃるお客様の特徴の1つかもしれませんが、湖上ステージで何か観たい、出し物は何であれ、湖上の空間でのオペラというものを観たいという、それだけでいらしてくださるお客さんもかなりの数いらっしゃいます。

そして、チケット・セールスに関しては、記者会見が毎年11月にあります。オーストリアのほかの音楽祭も大体、11月にプレス向けの記者会見をやって、翌年の夏のプログラムを発表するわけですが、プレゲンツも11月にプレス向けの会見が行われます。そこで発表されてチケット販売が始まりますが、近年、チケットの販売のパーセンテージからすると、オンラインでチケットをお買い求めになるお客様が増えています。プレゲンツ音楽祭でも、やはりオンラインのチケット販売を行っています。チケットの価格は、高い席になると、大体240ユーロ（3万6,000円）、安い席ですと、大体22ユーロ（3,300円）まで。22ユーロから240ユーロまでの価格の幅を設けています。240ユーロというのは、単に公演を見に行くというだけではなくて、そこにディナーなど食事が組み込まれていたり、バックステージ・ツアーが組み込まれているなど、特典が含まれています。

そして重要なのが、いろいろと財政的にもサポートしてくれているスポンサー企業です。こうした企業が、例えば、3,000人お客さんを連れてきてくれることになると、こうした企業に対して、また、この3,000人のお客様に対して、特別なパッケージを提供することもしています。そのパッケージに、バックステージ・ツアーや、食事会、あとは、芸術監督やアーティストなどがお客様をもてなすといったサービスを加えています。

さて、この湖上ステージのチケットは高いものから安いものまであり、高額なチケットを購入されたお客様に対しては、雨天の場合、後ろのフェストシュピールハウスで、規模を縮小して全く同じ曲目の公演を観ることができる。つまり、同じチケットで、雨で中止になった公演を観ることができるという特典が必ずついています。

少額のチケットを買われたお客様に対しては、そのチケット代が返金されるか、あるいは、その同じカテゴリーのチケットをフェストシュピールハウスの別の公演に振り替えるかが、チョイスできます。ただ、振り替えるにしても、公演がもう既に売り切れている場合には、チケットは手に入らないことがあります。

また、公演の最中に、1時間たってから急に雨が降ってきて、公演が途中で中止になる

ことがあります。そうしたときに、高いチケットを買ったお客さんは、またもう一度頭からフェストシュピールハウスで公演を観ることができですが、安いチケットを買ったお客さんは、60分もうごらんになったのでということで、お金を返さず、お帰りいただくこともあります。

この湖上ステージのプロダクション制作には、非常に年月がかかります。かなり大がかりなステージですから、前倒しで事前にすべて準備をしても、大体2年以上かかります。2009年の制作チームは、もう既に2006年、ことしの夏から少しずつプレゲンツで仕事を始めてくれています。これだけの大きな規模のステージになると、制作スタッフも、この湖上ステージならではのチームを組まなければならず、そのスタッフの選択にも大変神経を使います。また、この湖上ステージは、通常の劇場の舞台とは全く規模も、使っている道具等も全然違いますので、いわゆる通常のステージのセットをつくる、そういう制作会社ではこの湖上ステージのセットはできません。このプレゲンツの場合は、例えば、クレーンをつくる会社が一緒に制作スタッフに加わっていたり、エレベーターをつくる会社が制作チームに加わっていたりなど、通常の劇場では一緒に仕事をするのしない、いろいろな会社のスタッフが一緒にこのステージをつくり上げていきます。

この湖上ステージの舞台は、大体、トリプル・キャスト制で上演されますので、当然、リハーサル日程の組み方が非常に複雑になってきます。通常は朝昼晩と3回に分けてリハーサルをすることがほとんどですが、その都度、合唱とかエキストラ、技術、すべての人たちをどのようにこのリハーサルの間配分していくか、時間をどのように組んでいくかということで、大変複雑なスケジューリングが必要になってきます。

それから、ソリストに関しては、屋外で歌う、そして、特殊な機材を使った公演になるということ、これをまず承諾してもらわなければ、ここで歌うことはできません。そして、もう1つ、リハーサルに6週間近いリハーサル期間がありますので、6週間ここでリハーサルをしてもらうために、いろいろな条件がついてきます。

またリハーサルをもっとやりたいと、皆は考えます。けれども、そこは予算との兼ね合いもあります。これだけ大規模なステージ・セッティングになると、リハーサルをあまりやりすぎると、今度は、リハーサルを1回やるたびにお金がかかりますので、全体的な予算を圧迫してしまう。その辺のバランスが大変難しいです。ただ、ここ20年ぐらい前から、コンピューターの技術が大変上がってきて、すべてのスケジューリングの組み合わせや、それぞれのスタッフに情報を伝達するときなど、昔は一々いろいろ手書きでメッセー

ジを渡したり、電話などの手段をとったところが、今はオンラインでつながることができますので、楽になりました。今、コンピューターなしではできません。

さて、最近はコー・プロダクション、共同制作が増えてきています。私の個人的な見解では、金銭的な理由だけで共同制作という手段を選ぶのは、失敗につながるもどかと思っています。やはりお金ではなく、結果としてはもちろん予算面ではこのほうが楽ですが、それ以前に、やはり一緒に何か1つのものをつくり上げていこうという、このパートナーシップがそれぞれの側になれば、絶対に成功しません。

成功した例として1つ挙げられるのが、ブレゲンツで行われたヤナーチェクの《利口な女狐の物語》で、このプロダクションは、サンフランシスコのオペラハウス、それからジュネーヴのオペラハウス、そしてブレゲンツの三者共同制作でした。これは、最初はジュネーヴのオペラハウスでこのオペラを取り上げたいという案がまず出て、一応その制作案はジュネーヴでまとまっていた。けれども、ジュネーヴの劇場で一回やるだけでは、あまりにもコストが高すぎる。まだ完成しない段階でこれは一者だけでは厳しい。どこかパートナーをと探したときに、ちょうどブレゲンツでも同じ演出家との仕事をぜひしたいと考えていて、では一緒につくってもらおうではないですかという話になりました。サンフランシスコでも、このプロジェクトに何かいいものをつくりたいという意気込みがあって、この演出家と作品にも関心を持ってもらいました。セットの一部をブレゲンツで制作して、衣裳をサンフランシスコでつくって、そのセットと衣裳をスイスに持ち込んで、ジュネーヴでまず1回やり、そこからすべての劇場に回っていくという、その制作過程は非常に複雑なものでした。それぞれの劇場サイドが、ライバル関係ではなく、一緒に何かをつくり上げていきたいというパートナーシップで厚い信頼関係に結ばれていたがために、このプロダクションは大いに成功したと思っております。

共同制作というと、今申し上げた例は、一気に3カ所で作りに上げていくというやり方ですが、もう1つ、共同制作という場合には、どこかの劇場で初日を迎えて、その初日を迎えた舞台を別の劇場の総裁が観ていて、それを気に入って、自分の劇場に輸入する共同制作のパターンもあります。これは、一見、金銭的な面でお得のように聞こえますが、大体この初演を迎えたころには、演出家の頭の中では、また新たなコンセプトが生み出されているのが常で、同じ歌手が、また同じ形で次の劇場で雇えるとも限りません。スケジュール的な問題もあります。ですから、結果としては、何かその演出にも手を加えて、そして、歌手も新たに契約をして、また5～6週間リハーサルをもう一度組み直さなければい

けないということが出てきます。結果として同じくらいのお金がかかるか、新しい新作をつくってしまったほうが安上がりだったということもあり得るわけです。

また、最後になりますが、ことしのブレゲンツ音楽祭はいろいろと衣替えをして迎えることができました。2005年のシーズンが終わった段階で、ブレゲンツ音楽祭が開かれている一帯の改修工事がいろいろと行われ、大体の予算として2,800万ユーロをかけて全体的な改修工事が行われました。そこで、チケット・センターやレストランなどを新しく作り、リハーサルの空間なども少し広げたり、増やしたりしました。また、クロークなどもいろいろと少し空間を広げるような工事を行いました。2,800万ユーロかかりましたが、そのうちの大半をオーストリア共和国がお金を出し、500万ユーロ近いお金を個人の寄付を募って集めることができました。そうしたプライベートのスポンサーがお金を出してくれています。

では、フェスティバルというものは一体どういうものなのかという私の個人的な考えです。まとめて言うならば、何か新しいものをつくり上げるイノベーションの場、新しいものを生み出す空間だと思っています。それから、観る側、また、つくる側に新しいアイデアを生み出させる、触発する場所ではないかと思います。当然、大きな規模のフェスティバルになればなるほど、いろいろな面でのリスク、経済的なリスクも伴います。ただ、成功すれば、それなりの経済的な成果というのが見込めるのもフェスティバルのおもしろい、すばらしいところではないでしょうか。成功しなければいけない。そして、成功するためにはどうすればいいのかをチームでいろいろと考える、その考える場、トレーニングの場でもあると私は考えています。

つまり音楽祭、フェスティバルとは、制作スタッフ、それから運営スタッフ、アーティスト、それからお客さんも、その場でいろいろなことを考えさせられ、そして成長していける場ではないかと思います。ある意味、フェスティバルとは、夢を届ける、夢を生み出す特別な空間へと、特別な時間へと人々を誘ってくれる夢工場のような場所です。この特別なひとときを生み出すために、我々が今後どういうふうな形でさらに努力を続けていけるのかというのが、我々に課せられた1つの課題だと常日ごろから思っています。

ありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。

これからこの後、休憩時間を利用して、2002年の《ラ・ボエーム》の舞台の様子を

ビデオで上映させていただきますので、お時間のある方はごらんください。

(休 憩)

第Ⅱ部

パネル・ディスカッション

【司会】 それでは、大変お待たせいたしました。ただいまから第Ⅱ部パネル・ディスカッションを始めたいと思います。

改めましてパネリストの方々に登壇していただきたいと思います。先ほど基調講演をしていただきましたエヴァ・クライニッツさんと、それから通訳の岡本和子さんです。

そのお隣は、音楽評論家、そして、オーチャードホールのプロデューサーとしても有名な黒田恭一さんです。それから、もうお一方、音楽評論家の寺倉正太郎さんです。そして、モデレーターに昭和音楽大学の石田麻子専任講師です。よろしく願いいたします。

【石田】 引き続き、第Ⅱ部パネル・ディスカッションを進めさせていただきます。

時間が1時間と限られておりますが、休憩時間中に、皆様から質問をたくさんいただいております。その整理をする間に、今第Ⅰ部でクライニッツさんからのお話を受けて、黒田さんと寺倉さんとで、お話を進めていただきたいと思います。

早速、黒田さんのほうから、第Ⅰ部のクライニッツさんの基調講演を受けて、お話あるいはご質問といったことでお進めいただけますでしょうか。

【黒田】 はい、わかりました。

前半、とても緻密で、細かいところまでよくわかるお話を伺いました。実は、僕、2001年だったか2年だったか忘れましたが、このブレゲンツのフェスティバルに伺ったことがあります。僕が観せていただいたのは、さきほどの湖上オペラの《ラ・ボエーム》でした。この《ラ・ボエーム》を上演する前に、湖の向こうに夕日が沈んで、そしてドイツから来た船が着いて、そしてお客さんがいっぱいになって始まるという、ものすごくロマンティックですばらしい環境でした。

ただ、彼女の話に出てこなかった欠点が1つだけあります。ものすごく寒い(笑)。前から寒いとおどかされていたので、厚着して行って、それで、売店で売っているボエーム毛布とかというものも買いましたが、それでも賄いきれなくらい寒かった。ですから、ブレゲンツのオペラと聞くと、僕は、その夏にもかかわらず、あの寒かった思い出が浮かび上がってきますが、環境としては非常にすばらしいのと、セットがやはりとても大きいですから、ふだん劇場で観るのとは全く違うオペラが体験できて、とても興味深いものでした。

ただ、僕が聴かせていただいて、今のお話も聞いていて思ったんですが、やはり僕はオペラというと、生の声を非常に大切に思います。以前も、アグネス・バルツァ Agnes Baltsa がオーチャードホールでギリシャの歌を歌ったことがあって、そのときにアグネス・バルツァはマイクロフォンを使って歌いました。僕はアグネス・バルツァの歌は、ギリシャの

歌が大好きだったものですから、チラシの裏に推薦文を書きました。たまたまそのコンサートが終わった段階で入り口の辺にいたら、お帰りになるお客さん何人かから、「おまえが余計なことを言うからここへ来てみたら、マイクで歌ってるじゃないか」みたいなことを、どなられた経験があります。

確かに、マイクを通すと、声を聴く楽しみというのが、ちょっと違ってくる。これだけ6,700もある席ですから、やはりマイクロフォンは必要で、オーケストラが別のところにいること等々を考えると、現代のエレクトロニクスを効果的に使うことはとても意味があることだと思います。ただ、特に日本のオペラが好きな方は非常に純粹なところがあって、マイクを通した音に関してどう考えるだろうという疑問を、ちょっと持ちながら話を伺いました。

【石田】 ありがとうございます。そうなんです。ブレゲンツは寒いんです。休憩中にほんの一部ごらんいただいた《ラ・ボエーム》をずっと観ていきますと、2幕ぐらいでしたか、雨が降り出します。もう今は有名になってしまったロランド・ビリャソンRoland Villazónがずぶぬれで歌を歌っていて、髪の毛が額に張りついて大変な状況になっている。それでも歌手はもう演じきって、歌っているのです。一方で、お客さんもコートを着て観ている状況です。でも、それは屋外ならではの、ちょっと賭けのようなところがありまして、楽しみでもあるのかなと思いつつ聞いておりました。

それでは、寺倉さんのほうからも少しお話をいただいてよろしいでしょうか。

【寺倉】 私はこの場にしながら、ブレゲンツ音楽祭には、まだ行ったことがないんです。確かに生音、生オーケストラの魅力は、オペラの醍醐味の大きな部分を占めるということではありますが、近年NHKの衛星放送等でブレゲンツ音楽祭の映像が流されるケースが増えてきて、たしか一番最初は、現在インテンダントを務めているデイヴィッド・パウントニーの演出した《フィデリオ》が放映されました。その後、リチャード・ジョーンズRichard Jonesという、やはりこの人もイギリスの演出家ですが、今黒田先生からお話があった《ラ・ボエーム》もビデオで放映されています。今年、ロバート・カーセンRobert Carsen、日本でもおなじみの演出家ですが、彼の演出した《トロヴァトーレ》も、NHKがやはり共同制作で収録に参加しているので、やがて放映されるそうです。

今、DVDで、《ラ・ボエーム》と、フェストシュピールハウスの屋内でやったカール・ニールセンの《仮面舞踏会》、これもパウントニーの演出で、この2本が手に入ります。残念ながら《ラ・ボエーム》も《仮面舞踏会》も日本語の字幕は入っていませんが。先ほ

どの黒田先生がおっしゃったPAを使って声を増幅することの是非というか、つながることですが、ブレゲンツ音楽祭自体が、特に湖上舞台の場合に、やはり屋外という制約から、大体1つの上演を休憩なしで2時間程度にまとめるということもあって、場合によっては作品をカットしているということがありますね。ただ、これは難しいところで、やはりエンターテインメントとして、オペラをイベントというか、1つのスペクタクル、見せ物として観ることによって、ブレゲンツでオペラというものに触れ、オペラの楽しさに初めてそこで目覚める方もいるという、功罪あるうちでは、やはり非常に功績のほうが大きいのではないかと考えております。

もう1つ、ここ20年ほどのドイツ・オーストリアを中心としたオペラ界のトレンドとしては、やはり演出家主導の舞台について、功罪両方から言われております。特にブレゲンツで特徴的と思われるのが、エンターテインメント性を重視しながらも、その作品をないがしろにするのではなく、むしろ作品の新しい解釈というか、先ほど一部流されていた《ラ・ボエーム》なども、じっくりごらんになられると、非常に鋭い解釈で、作品に対して新しい見方を提示するような、レベルの高い演出がなされています。

現監督のデイヴィッド・パウントニーは、イングリッシュ・ナショナル・オペラ（以下ENO）、英語でオペラを上演するロンドンの劇場ですが、そこで演出監督をやっている、その後、今はブレゲンツで監督をやっている人です。例えば、この講座のシリーズで来たことがある、バイエルン州立歌劇場のインテンダントをこの7月まで務めていたピーター・ジョナスPeter Jonasが、そのイングリッシュ・ナショナル・オペラの総監督であり、演出監督がデイヴィッド・パウントニーでした。そして、パウントニーの補助をしていたのが、日本では新国立劇場の〈ニーベルングの指環〉で有名になったキース・ウォーナーKeith Warnerです。

そうして、ピーター・ジョナスさんがミュンヘンに行くことにより、ミュンヘンのオペラハウスでは非常にENOスタイルの舞台が増えた。同じように、ブレゲンツも、パウントニーさんを中心としたENOスタイルがそこで入ってきた。現在のウィーンでも、チューリヒ歌劇場でもそうした舞台はありますし、ヨーロッパにおいて非常にシェアが大きくなっています。ただ、やはりトレンドというものは飽きられることもあるわけで、今、そういったものはやや多くなりすぎて、その中での好き嫌いが、お客さんの側にも出てきているようです。クライニッツさんがこの11月から移られるブリュッセルのベルギー王立モネ劇場は、やはりシーズンを通したオペラハウスですので、ブレゲンツとはいわゆるお

客さんに対する使命というか、役割が当然異なるわけですが、ブレゲンツの場合は、非常に視覚的に派手な舞台が要求されるのに対して、ブリュッセルのモネ劇場は、大きさとしては手ごろな小振りな劇場ですので、もっと別のスタイルが必要とされるのではないかと思います。

例えば、モネ劇場というのは、モルティエさんがかつて監督をされていましたが、モーリス・ベジャールMaurice Béjartのバレエ団を持っていたところです。そのベジャールのバレエ団から、古典バレエにとどまらないダンスも重視していて、今、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルAnne Teresa de Keersmaekerという振り付け兼踊り手の方が率いる、「ローザスRosas」というグループが、モネ劇場を本拠にしています。ケースマイケルが大野和士さんと協力してオペラをつくったりしているという意味では、今、非常にタンツテアターとオペラとの共同作業が始まりかかっているということも、クライニッツさんのお話に触発され、思いました。

【石田】 ありがとうございます。いろいろなお名前が出てきましたけれども、どのお名前も、今ヨーロッパの一線で活躍されている方ばかりだと思います。

先ほどからお聞きしていても、また映像をごらんになってもわかりますように、ブレゲンツ音楽祭はどちらかというと、いわゆる正統派の劇場で行われるオペラの舞台ではないわけです。そういうところに、パウントニーや、お手元の資料のいろいろな演出家、指揮者に、一流の人たちが来ているのです。音楽祭のプログラムの組み立てについて、更に教えていただけますか。

【クライニッツ】 まず湖上ステージのプロダクションを1回実現するために、通常の屋根付きの歌劇場で1つのプロダクションにかかるコストと比較してみますと、湖上の1ステージの制作コストは、通常のオペラハウスの5公演分の制作費に匹敵すると言われています。時間的にも5倍、コストも5倍かかるという大がかりなものです。

そして、この湖上ステージについては、ブレゲンツ音楽祭の話イコール湖上ステージの話にどうしてもなってしまう。予算面でもやはりそういうことがあるわけです。ただ、ブレゲンツ・フェストシュピーレは、決してその湖上ステージだけではなく、先ほど紹介したように、並行してさまざまな会場でいろいろと珍しい作品、音楽史上、上演されるべき、そして上演する価値のある作品、そしておもしろい演出、いろいろと実験的な試み等が行われています。ただ、そういった公演が可能なのも、この湖上ステージで行われている舞台のチケットをどれだけ売ったかという、その収入の一部がすべてそうした珍しい公演、

ほかの会場で行う公演の制作費用に充てられているというのが現状です。

ですから、どうしてもこの巨大ステージを使い、また、いろいろなことを並行してやらなければいけないことから、チケット販売を考えた場合に、まずこの湖上ステージの舞台で、何枚チケットを売るかにすべてがかかっています。2007年のプロダクションに関しても、ほかの会場の座席のチケットよりも、まずはこの湖上ステージのチケットを売っていかなければいけないのが、我々にとっては最優先課題になります。矛盾のようですが、現実はそのようなものなのです。

あと、お天気とPAの話ですが、すべて運を天に任せるしかないという音楽祭です。

12、3度しか気温が上がらない夏という悲惨な年もあれば、2003年の《ウェスト・サイド・ストーリー》の公演のように、ずっと晴天に恵まれて、すべてのチケットが売り切れ、完売状態が続き、3週間目になって、もう1ステージつけ足して追加公演をやっても大丈夫だということで、初めて追加公演を1回やろうと決めたときがありました。このときは、もともと予定されていなかった公演でしたが、フェストシュピールハウスのほうでコンサートがまずあり、このコンサートが終わってお客さんがはける時間帯を計算して、夜の10時半から《ウェスト・サイド・ストーリー》をもう一度湖上ステージで上演しました。それでも満席になり、大体深夜0時過ぎまで続きましたが、そういうこともあるわけです。

あと、聞こえてくる声が生の声ではなくてPAを使った声であるということについて、音響面に関しては、年々いろいろと改善されてきておりまして、《ラ・ボエーム》の舞台1つとっても、2001年から2006年までの間に非常に技術的にもすばらしい、いろいろな改革が重ねられてきました。当時と比べると、今は全く比較にならないくらいの音響になっていると思います。確かに生の声が聴けないという問題はあるかもしれませんが、私がいつも言うことで、内容のない声は、幾らPAを使っても、そのままでしか聞こえない(笑)、美しくない声を、PAを使って美しくすることは不可能であると考えています。我々は、技術的にいかにその美しい声を、その美しいまま出せるかということ、いろいろと工夫を重ねていくしかないと考えています。

【石田】 なるほど。

【黒田】 ちょっとその《ラ・ボエーム》について、僕、補足的にお願いしたいんですけど。この《ラ・ボエーム》、湖上オペラのステージがとても大きいものですから、例えば、アルチンドーロの部屋とか、ミミの部屋とかありまして、ミミはそこで何か縫い物を

していたり、アルチンドーロは奥さんとテレビを見ていたりして、そして、登場に必要なになると、そこから出ていくという演出でした。これは劇場内での上演ではおそらく不可能で、やはりあれだけ広いところでやるからこそ、そのおもしろさが出るのです。例えば今度の《イル・トロヴァトーレ》にしても、最後、炎に包まれちゃう。本火を使うことだけでもステージでは難しいのが、全部のステージが火で包まれちゃうみたいなことは、演出家たちにとっても、やはり湖上でしかできないことで、これは独特の魅力があるものです。僕はマイクロフォンを使うことが悪いと言っているのではなく、やはり大きいところでやったことの魅力も十分にある。ただ、お出かけになるときは、せいぜいホカロンを山ほどお持ちになることをお勧めします。

【石田】 またそちらにお話が行ってしまつて（笑）、よっぽど寒い思いをされたんだと思います。いかがでしょう、そういうスペクタクル性がオペラの芸術面に邪魔になることはないのでしょうか。

【黒田】 例えば、《ラ・ボエーム》というのは非常にインティメートな作品ですよ。非常にインティメートな情感を歌っている作品だけれど、ああ、こういうやり方もあるかという感じで僕は楽しませていただきました。ですから、先ほど寺倉さんから、入門として有効であろうというお話がありましたが、例えば、オペラにあまりなじんでいない人が、その《ラ・ボエーム》によって楽しみを知るということもできるでしょう。ただ、逆に、僕なんか、そこそこオペラのすれっからしですけれど、そういう人間が観ても、ああ、こういうやり方があるのか、あそこでアルチンドーロがいて、ここにミミが何か縫い物をしている、おもしろいなという見方も可能で、やはりそこは演出の才気というのが十分に発揮されていました。ただ、このプロダクションは、もしかすると歌手より演出家のほうがたくさんギャラを取っているんじゃないかということも思ったりもします。

【石田】 実は、そのキャストの部分はクライニッツさんにお聞きしたいところです。先ほどの《ラ・ボエーム》もビリヤソンがまだ有名になる前の映像です。ヴェッセリーナ・カサロヴァ Vesselina Kasarova も、今やもう本当にトップクラスの歌手になりましたが、ブレゲンツに無名時代に出ているそうです。クライニッツさんはオペラ監督という立場で、キャスティングの責任者でもいらっしゃいます。若手の、これから出ていく直前の歌手をつかまえるのは、力の発揮のしどころですよ。その辺りを教えていただけますか。

【クライニッツ】 まずチャンス。ラッキーでなければいけないというのが1つ。あと、電話代はかなりかかります。いろんなところへ電話をかけまくって情報を集め、そして、

あちこち旅をしなければ、そうした若い良い才能には出会えません。

あと、歌手は、個人的にも常にネットワークを大事にしています。いろいろなところで「おもしろそうな歌手がいる」といったうわさをいち早く聞きつけて、個人的にも聴きにいくことを欠かさない、こういう努力が必要だと思います。私は自分の耳で実際に聴いたことのない歌手、また、実際に自ら接触を持ったことのない歌手を雇うとことは一切しません。

それから、あと、ブレゲンツならではのことがあります。やはりフェスティバルなので、非常に長い時間、6週間とか8週間とかリハーサルを重ねるわけです。それから、ブレゲンツでは若い歌手を雇うことが多く、大体はトリプル・キャストを組んでいます。このトリプル・キャストを組んでいて、若い歌手で、まだスターになる直前の歌手を選んでいるので、皆さん、あまりお互いにライバル心みたいなものがなくて、仲間うちと一緒にこの6週間楽しく仕事をしていくところがある。例えば、ビリヤソンとジョセフ・カレーヤJoseph Callejaとアルフレード・ポルティッラAlfred Portillaという、トリプルで組んだことがありますが、やはりそのときは、まだみんな20代の若い歌手たちで、だれがトップで、主役で、端役で、二番手でということは一切に気にせず、和気あいあいとやっていたところがあります。

すばらしいと思ったのが、とにかく皆、楽しんでブレゲンツのフェスティバルのプロダクションに参加してくれることです。例えばビリヤソンが歌っているときに、残り2人が劇場の客席で座って聴いていて、自分の同僚に、もう本当に目いっぱいブラヴォーと拍手を送っているという、その姿を見たときに、もうこれは友情関係が彼らの間に芽生えていて、パートナーとして本当に心から拍手を送っているんだと、温かいものを感じました。

ブレゲンツに関しては、ここ6年くらい前からそういうスターになる直前の良い若い歌手をピックアップすることが始まったわけではなく、実はもう大分前、20年、30年くらい前から、私の知る限り、後のブルク劇場の大スターがそこで演じていたり、また、歌手でも、後の大スターになった人たちがそこで歌っていたということがあります。ここは将来のスターがそこで歌ったり演じたりしていることが非常に多い音楽祭です。

【石田】 なるほど。ほかの音楽祭でも、これから出てくる歌手をチェックする上では欠かせないというような、つまりいい新人を必ず押さえているから、ここは聞いておかなければいけないという話を業界の間でも聞くことがありますね。ブレゲンツもその1つになっているのかなと、今のお話を聞いていて思いました。

ブレゲンツ音楽祭は最初からこれほど大きな音楽祭ではなかったと、さっきの第Ⅰ部のお話にありました。では、今ほどの規模の音楽祭が実現できるようになったのはいつごろからで、その理由は何で、今でもチケットの販売が悪くて財政的に苦しくなったりすることがあっても、そこを解決するにはどうしていますかというお話をしていただきたいというリクエストが出ています。

【クライニッツ】　まず過去と比べて、いつから今のブレゲンツ音楽祭の規模になったかは、私の前任者たちの時代、先輩たちの時代も、またそれは1つのすばらしい音楽祭をつくり上げていたわけで、比較することはなかなか難しいです。

ただ、やはりブレゲンツにとって大きな転換期となったのが、1983年のシーズンではないかと思います。この83年というのは、ウォップマンがインテンダントに就任した最初の年で、ジェローム・サヴァリー Jérôme Savary の《魔笛》、これが大きなきっかけ、転機になったと思います。この湖上ステージを使ったサヴァリー演出の《魔笛》は、非常に技術的にも複雑で、あまりにも技術的に解決すべき問題が山積していたがために、技術スタッフのチーフの人間が途中ですべて放りだして逃げ出そうとしたというくらい大変なものでした。これが大成功を収めて、これは1年で終わらせるのはもったいないということで、翌年も、もう一度これをやろうということになり、2年にわたってこの《魔笛》が上演されました。ここからブレゲンツの湖上ステージは2年サイクルで新しくしていこうという発想が定着しました。2年だったら、かかった制作費が回収できるという目安みたいなものを、この83年の公演のときにつくることができました。ですから、83年が1つの転機だったと思います。

【石田】　わかりました。黒田さん、音楽祭にはお客様としていらしたと思いますが、周りのお客様の様子はいかがだったのでしょうか。というのは、若い観客を引きつける秘訣は何か、お客さんの構成はどうなっているか、要するに老若男女、どんな方がいらしているのかというようなご質問が、会場から幾つか出ているのです。

【黒田】　例えば、ウィーンの国立歌劇場とかミラノのスカラ座に何うと、もうオペラだけが目的という感じの方が、当然だけれど、この歌手が歌うからこの公演に来たという、興味がかなり焦点化された方が客席にいたことがわかりますが、このブレゲンツの場合、極端なことを言うと、だれが歌っていてもいいや、と。それはいい歌じゃないと困るけれど、それほど厳しく限定していなくて、とにかく湖の上に舞台があるということは非常に興味深いことですから、そこに身を置くことの幸せというのが、まず一番あると思

ます。

ですから、オペラでは、もちろん非常にすぐれたオペラの公演ではあるけれど、一種ツアーリズム、旅行の楽しみの延長の先に、この湖上オペラがある。やはりいろいろほかのこともこの音楽祭では行われてはいても、湖上オペラだけが突出して話題になって写真が紹介されたりすることもありますけれど。だから、例えば、ヴェローナとも違うと思います。野外でやっけていても、やはりヴェローナの場合には、もう少しオペラ、オペラしているけれど、もう少し開かれた感じで皆さんがいます。だから、割とゆったりと楽しんでいるという印象を持ちました。

【石田】 皆さんが気楽に楽しみに来ているということですね。

【黒田】 そう。だから、船が来たり、星が輝いたり。ヴェローナもああいう外だけど、船は来ませんから。

【石田】 ちょっと無理ですね、それは。実際にドレスアップしたお客様が船でドイツ側から湖の棧橋に着いて、その人たちがひょこひょこ歩いて、湖上ステージの客席にお座りになる、そういった流れもあるようです。

【黒田】 だから、あの船の中で、来る方たち、ワインか何か飲んでいないはずはないわけですよ。黙って乗ってくるとは思えないわけです。そうすると、みんな幸せな感じでいらっしやるでしょう。だから、もう……。ただ寒いだけで。

【石田】 ビールじゃないほうがいいんですね。どうでしょう、クライニッツさん、いろんな方、お子さんも楽しみにいらっしやるということですね。

【クライニッツ】 これは日本では、どういう状況になっているかは存じ上げませんが、オーストリアにおける音楽教育事情というのは決して芳しいものではありません。いろいろと問題を抱えている、あまり充実していないという問題が実はあります。そうしたことから、ブレゲンツでは、オーストリアだけではなくて、隣接するドイツやスイスの学校などを回って、そうした学校の生徒さん、それから学校で教えている音楽の先生たちを音楽祭のほうに招待して、最後のほうのリハーサル、つまりゲネプロの直前くらいのリハーサルを開放する形で、この子供たちに観せるということをしております。7,000人くらいのお子さんがこれを見に来るわけです。このお子さんたちがリハーサルを見学した後に、午後2時くらいから、そこで演奏している、また歌っているアーティストたちとの交流の場も設けられており、彼らと実際に話をすることもできますし、また、ステージ見学、この湖上ステージのバックステージ・ツアーもちゃんとあります。技術者たちと直にお話を

したり、いろいろなことを教わったりする体験コーナーも設けています。

この辺がもしかしたらヴェローナと大きく違うところかもしれませんが、子供たちが実際にステージを見学して、そのステージで働いている人たちと直接接することによって、自分たちもこういう仕事があるんだということを教える、1つの現場にもなっている。また、プレゲンツの舞台の上で、作品によっては児童合唱団なども登場しますが、この児童合唱団は、大抵は地元の児童合唱団であることが多い。そうすると、こうしたステージと一緒に同じ舞台に立つ魅力を、若いときからお子さんたちに教えることができる。自分もこの合唱団に入れば、ここで歌うことができるんだなということをお子さんに教えることもできるわけで、オペラというと敷居が高いように思われている、そういう芸術をお子さんに少し身近にするきっかけをつくってあげることができるのではないかと思います。

【石田】 この湖上ステージのバックステージ・ツアーというのは、ぜひ私も参加してみたいです。ヘルメットはかぶるんですか。要らない、わかりました。

では、寺倉さんにお話をさせていただきたいと思うんですが、プレゲンツと同様に湖上ステージを持っているメルビッシュという音楽祭がオーストリアにあります。そちらとの関係はライバル関係ですか、それとも、協力関係ですかというご質問がありました。お手元の資料のように、今ヨーロッパでは大変多くの音楽祭があり、オーストリア国内にも、主なものを挙げただけでこれだけあります【当日配布資料「世界のオペラ・フェスティヴァル」参照】。つまり、ザルツブルクでも4つほどあり、ウィーンも、グラーツも、インスブルック等々もある中で、その1つとしてのプレゲンツがあるという状況です。もちろん、ほかの国、アメリカ、イギリス、イタリア、スイス、ドイツ、いろいろな国でこれだけ大きなオペラ・フェスティヴァルがあつて、古楽フェスティヴァルなどというのもブームかのように、いろいろなところでやっているという状況があります。今のヨーロッパの音楽祭の現状を少しお話をいただけるとありがたいです。

【寺倉】 例えば、ことしはモーツァルトの記念の年ということで、ザルツブルク音楽祭が特にクローズアップされたことはあると思います。ザルツブルク音楽祭は、とにかくモーツァルトの全舞台作品を上演するというのを公約にしてしまったために、限られた時間とお金、人材でそれを実現するために、ものすごくコー・プロダクションが多かったんです。中に1つだけ異彩を放っていたのが、H. W. ヘンツェHans Werner Henzeという現代の作曲家が三島由紀夫の原作をオペラにし、それを日本語版に書き替えたもの、《午後の曳航》というオペラを演奏会形式で日本人の歌手の方々が主要な役を担って歌われました。

これはゲルト・アルブレヒトGerd Albrechtの指揮でしたが、そのほかは、モーツァルトの作品に関しては、イタリアやドイツ、あるいは別の音楽祭とのコー・プロダクションなどが非常に多かった訳です。

メルビッシュの場合は、基本的にウィーンのリッツォーのフォルクスオーパーの人たちが、夏の間、そこで何かをやるということです。これはクライニッツさんに教えていただきましたが、ハラルド・セラフィンHarald Serafinというフォルクスオーパーの名物男が、いまや象徴的な存在として、歌うよりは、キャバレティストとして舞台に出てきてお客さんをわかせる役を担っていて、いまだに人気があるということです。

また、今の石田さんのお話とはちょっとずれますが、ザルツブルク音楽祭に日本人の歌手が出たように、来年、ブレゲンツの音楽祭で、湖上ステージは《トスカ》が、ウルフ・シルマーUlf Schirmerの指揮、フィリップ・ヒンメルマンPhilipp Himmelmannの演出で予定されています。もう1つ、屋内のフェストシュピールハウスでは、ベンジャミン・ブリテンの《ヴェニスに死す》というオペラを、ピーター・ブルックPeter Brookの劇団に長くいて、俳優及び演出家としてヨーロッパでの活躍が多い、ヨシ笈田さんという日本人の演出家が来年ブレゲンツに登場します。日本人の歌手や日本人の指揮者がブレゲンツに出る可能性についても、クライニッツさんに伺いたいと思います。

【クライニッツ】 指揮者では、完全な日本人とは言えませんが、ケント・ナガノKent Naganoさんがブレゲンツで指揮しています。あと、実はことしの夏《青ひげ》、オペレッタをやりましたが、ここでは日本人の若い歌手が2人が出演しています。ウィーンに留学する日本の声楽家、音楽家は、とても多いですが、そうしたウィーンで勉強している男性と女性の歌手それぞれに役を与えました。これはウィーンに行って、私がオーディションをして、その結果、その2人が選ばれたという状況です。

【石田】 お時間もなくなってきましたので、お話をまとめる方向にと思っております。

【黒田】 ちょっと僕、伺いたいことがあります。音楽祭というのは、一種の街おこしだと思います。このブレゲンツの街も、行ってみると、先ほどからお話のように、とても小さい街です。この音楽祭が街おこしの一つの方法とすると、このブレゲンツの音楽祭、湖上オペラだけでもよかったのではないかという気がするんです。やはり湖上オペラは、とっても有名になっています。でも、やはり音楽祭というからには先ほどのお話のように、そのほかのいろんな催しをやっている理由というのは何でしょうね。

【クライニッツ】 まず、メルビッシュの音楽祭がそうであるように、湖上ステージの

この舞台だけをやっているとしたら、我々は助成金なしでも十分にやっていけます。ただ、この湖上ステージの催し物だけに終始しないのは、フェスティバルと言われる以上は、いろいろなお客様の嗜好や要望に応えなければいけないという義務があるからです。いろいろなお客様、いろいろなものを聴いてみたいというお客様がいる。彼らのニーズに応えなければいけません。

その一方で、若いアーティストを紹介していく義務もあります。例えば、若い作曲家に湖上ステージを与えるということは、我々はしません。若い作曲家には、ヴェルクシュタットビューネ、「工房」と呼ばれる舞台で彼らの作品を紹介します。彼らを招いて曲をつくってもらうということをするわけです。

また、オーケストラはウィーン交響楽団がメイン・オーケストラです。彼らは、4週間後くらいに日本ツアーをスタートさせます。それだけ国際的な知名度の高いオーケストラを4週間以上拘束するわけです。そうすると、同じ舞台を繰り返し4週間やるだけでは、彼らのほうでも納得しないということがあります。同じ舞台をやるだけではなく、もうちょっとほかのものもやらせてくれという、アーティスト・サイドからのニーズも出ます。

そう考えた場合、やはり我々としては、予算の中で工夫できる限り工夫をし、アーティスト・サイドのニーズにも応えつつ、多様化するお客様のニーズにも十分に答えられるだけの催し物を提供しなければならず、湖上ステージだけではないということになります。

【黒田】 そのために、公演がルーティンにならないで、非常にクリエイティブになっていると考えてよろしいでしょうね。

【クライニッツ】 ことはモーツァルト・イヤーで、あちこちでモーツァルトが演奏されていますが、我々は当初から、もちろんモーツァルトもやるけれども、それ以外の作曲家も取り上げることをしており、ブルックナーも、マーラーも、ベルクのコンチェルトもやり、ツェルハを入れたり、非常にいろいろな作曲家の作品を取り上げました。オーケストラにとっても、やはりそれが1つのモチベーションにもなる。そして、常に新鮮な気持ちで舞台に向かえるという利点があります。そして、やはり何よりも、ウィーン交響楽団の新しい音楽監督ファビオ・ルイジFabio Luisiという指揮者がブレゲンツに来てくれるようになったのは、我々にとって大変大きなメリットです。

【石田】 クライニッツさんは今度11月からベルギーのモネ劇場で新たにポジションを得られて仕事をされるということで、今ちょうどその合間のターニング・ポイントだと思います。ヨーロッパではこういった動きは、もちろん、歌手にも小さな劇場で歌い始め

て、だんだん大きな劇場でキャリア・アップしていくという大きな流れがあるわけです。制作スタッフでも、そういう流れがあるということですね。クライニッツさんにとっての、ブレゲンツでの総括をしていただきたいと思います。また、これからモネ劇場でどのようなことをされていくのか、お話しいただけますか。

【クライニッツ】　ブレゲンツ・フェスティバルとは、大きなリスクを伴う現場です。先ほどから申し上げているように、湖上ステージを失敗すると、全部がなし崩し的に失敗する、予算面でも大変なリスクを背負う、そういうプレッシャーの中で毎年ずっと仕事を続けなければいけないという意味で、非常に大変な職場だと思います。

ただ集中した形で、大体同じチームで1つの巨大なプロジェクトをつくり上げていくので、成功すると、そうした現場からなかなか離れられなくなるというところがあります。チームとの一体感というものが、長い制作過程を経て生まれてきますので、非常に離れがたい、本当にもう家族のような制作チームになっているのがブレゲンツの大きな魅力でした。

ただ、その一方で、対外的にはブレゲンツだとフェストシュピールなので、夏の公演をしているときは仕事をしているけれど、そのほかの月は仕事してないじゃないかということをおっしゃったりもしますが、実際、制作というのは年間通じてずっと少しずつ続けられているわけなので、なかなかその裏の部分は見えてこない。仕事の仕方というものが、フェスティバルの場合と、年間通年でやっているオペラハウスとは全然違います。一度10カ月舞台をやっている劇場でも、仕事をしてみたいと思ったのが、モネ劇場のオファーを引き受けた理由です。決して自分の中で何か具体的なキャリア・プランニングがあって、ブリュッセルに行こうと思ったわけではなくて、ブリュッセルに行くことを決心した理由は、10カ月通年の劇場で、少し違うタイプの仕事がしたかったということです。

もう1つ、住む場所として、ブリュッセルという街は大変魅力的な街です。いろいろな言語が飛び交いEUの本部がある、ヨーロッパの中央都市です。その中央都市でありながら、非常に人間的なサイズというものを保っている街です。劇場のサイズというのも、非常に仕事がしやすい、とても親密性を保った、いいサイズの劇場であるということから決心をいたしました。ロンドンやニューヨークのような巨大都市とはまた違う、そこでは実現し得ないような仕事が、ブリュッセルの街ではできるような気がします。

【石田】　ありがとうございます。

先ほど黒田さんのほうから「ツーリズム」という言葉がございまして、クライニッツさ

んが何度かおっしゃっていた言葉に「巡礼の地」というのがありました。フェスティバルというと、どうしてもそういう言葉とは切っても切り離せないような気がします。ちょうど「ツーリズム」という言葉も出ましたし、そのフェスティバルの持つ魅力は何なのか、言葉で表せない雰囲気のようなものなのか、その辺りが、キーワードのような気がしています。

【黒田】 フェスティバルが楽しいのは、前半でもお話があったように、日常生活から完全に切り離されているところで楽しめることだと思います。随分前ですが、ザルツブルクの復活祭音楽祭でカラヤンが《マタイ受難曲》をやったことがあり、そのときは午前11時から第1部の公演があって、午後の公演が、たしか4時ぐらいからだったと思います。その間にお昼ご飯を食べて、昼寝してきなさいと。そして、《マタイ受難曲》を前後2つに分けて聴くと。これは、上野の東京文化会館でやられても、僕たちは困るわけです。やっぱり続けて聴かせてくれないと。ところが、旅先であればそれが可能になる。だから、日常生活でいろいろついている尾ひれが全部なくなって、自由にいるところで、またオペラの体験というのはかなり非日常的な体験ですが、その非日常的なところで、もう1つ非日常的な体験ができるから、おもしろければものすごくおもしろいし、つまらないと、ここに来てこんなものを聴かされて、というむかつ腹が立つことはすごくあります。切り離されたところにいるということの楽しさだろうというふうに思います。

【石田】 それでは、お時間が来てしまいましたので、最後に1つ、これはリクエストでしょうか。本日の参加者は、ブレゲンツ音楽祭のチケット購入を優先的にしていただけられるのでしょうか。本日の参加者に対して優待連絡をいただけることはありますか（笑）。

【クライニッツ】 昭和音楽大学はどうかわかりませんが、旅行会社を通してチケットを購入していただきますと、団体でチケットを購入していただけます。当然ながら、事前に彼らのほうにチケットが回るようになっています。特にこの湖上ステージのチケットに関しては、日本のさまざまな旅行業者の窓口にお問い合わせいただければと思います。

【石田】 ありがとうございます。来年の湖上ステージは《トスカ》だそうです。

それでは、最後に皆さんにご案内をさせていただきます。こちらのA4の紙は、今後の本プロジェクトの公開講座シンポジウムの予定です。1月にグラインドボーン音楽祭のお二方をお呼びすることになっております。「オペラをめぐる祝祭」という、本日と同じタイトルで、グラインドボーンにおける祝祭性とは何かをお話したいと思っています。3月にはロバート・カーセンさん、演出家です。ことしと去年のブレゲンツ音楽祭の湖上ス

ページの《イル・トロヴァトーレ》の演出をされたカーセンさんが、来日されます。その折にこちらのシンポジウムに出ていただけることになりました。今どんどん交渉しているところですので、また皆様にご案内を差し上げたいと思います。その折にはどうぞ、お越しください。

それでは長くなりましたが、本日のシンポジウム、「オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方～ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営」、ゲストにエヴァ・クライニッツさんをお迎えて、黒田恭一さん、寺倉正太郎さんとともに進めてまいりました。本日のシンポジウム、終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

当日配布資料

オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方
～ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営

【講師】エヴァ・クライニッツ：〈ブレゲンツ音楽祭〉オペラ監督

「今日のオペラ・フェスティバルの運営手法～ブレゲンツ音楽祭をめぐって」

基調講演概要

1. 今日の音楽祭

- 音楽祭をどのように創りあげるか
- 音楽祭が真の音楽祭になるとき
- ヨーロッパ全土に広がる音楽祭の趨勢
- 音楽祭を創りあげるために必要なこと
 - ・巡礼の地としての音楽祭
 - ・音楽性/芸術性
 - ・音楽祭を取り巻く環境、自然の美(または歴史的背景、作曲家の生誕地であること、など)

例： グラインドボーン音楽祭、ウェクスフォード音楽祭、グレインジ・パーク・オペラ・フェスティバル、
シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭、サヴォンリナ音楽祭、チューリヒ音楽祭

2. オーストリア——クラシック音楽とオペラの国

～ハイドン、モーツァルト、ブルックナー、マーラー、ベルク、ツェルハ、ハース、etc.

2.1. ブレゲンツ音楽祭の歴史とそのはじまり

- ・1946年7月の〈スポーツ・文化週間 Sport and culture week〉
- ・メイン・パートナー：ウィーン交響楽団(1946年～)

3. ブレゲンツ音楽祭の特徴

3.1. 地理的条件

- ・オーストリア、フォアアールベルク州
- www.bregenz.at

3.2. 湖上ステージ Seebühne

- ・屋外でのオペラ上演
- ・2年毎の新制作
- ・新デザインの立体的な構造物

3.3. 祝祭劇場（フェストシュピールハウス）Festspielhaus

- ・珍しい作品、埋もれた作品の発掘・上演

3.4. コルンマルクトテアター Kornmarkttheater

- ・オペレッタ上演、他のプロダクション・作曲家・テーマに関連する埋もれた作品も上演

3.5. KAZ（私たちの時代の芸術 “Kunst aus der Zeit”）

- ・現代芸術の上演

【会場】ヴェルクシュタットビューネ Werkstattbühne
ブレゲンツ芸術の家 Kunsthaus Bregenz
shed8(芝居劇場)

3.6. マルツィン広場 Martinsplatz

- ・せりふ劇の劇場

3.7. オーケストラ演奏会

- ・ほとんどの場合、音楽祭管弦楽団(ウィーン交響楽団)による

4. 音楽祭運営～組織と財政

- ・ブレゲンツ音楽祭有限会社 Bregenzer Festspiele GmbH.
CEO は 2 名： 芸術ディレクターと財務ディレクター

4.1. 財務状況

- ・市、地域、オーストリア政府から助成を受けている(理事会 Kuratorium)
- ・民間助成と友の会組織：ブレゲンツ音楽祭友の会 Die Freunde der Bregenzer Festspiele

4.2. 「芸術創造」とは「価値を創造すること」

- ・「直接的に利益を生むわけでないこと」に力を注ぐのは意義のあること

4.3. 観客

- ・来場者国別比率：ドイツ・60%、オーストリア・25%、スイス・10%、その他の地域 5%

4.4. ボックス・オフィス

- www.bregenzerfestspiele.com
- ・郵便、電子メール、ファックス、電話、インターネット
- ・インターネット予約の重要性の増加
- ・セールス・パートナー(B2B)：世界的なチケット販売拠点
www.festspielhaus.at

5. 湖上ステージ：制作の過程と企画

5.1. 屋外版と屋内版

5.2. 湖上ステージ用の作品の選択

- ・どの作品が湖上ステージにむいているか
- ・どのチームがそれを演出・上演するか
- ・誰が長い準備期間を引き受けるか
- ・制作過程における技術的な側面

5.3. リハーサルのスケジュール、キャスティング、歌手

5.4. テレビ放送

6. 共同制作という「芸術」

重要性、メリットとデメリット

【共同制作の例】

- ・カール・ニールセン作曲《仮面舞踏会》、祝祭劇場 Festspielhaus での上演
ロイヤル・オペラ・ハウス・コヴェント・ガーデンとブレゲンツ音楽祭の共同制作
(この他にボフスラフ・マルティヌー作曲《ギリシャの受難劇》も同じ共同制作)
複数の国際的な賞を受賞(演出:デイヴィッド・パウントニー、装置:ステファノス・ラザリディス)
- ・レオシュ・ヤナーチェク作曲《利口な女狐の物語》
サンフランシスコ・オペラ、ジュネーヴ・オペラの共同制作
- ・クルト・ヴァイル作曲《牛売り》(コルンマルクト劇場)
ウィーン・フォルクスオーパーとリーズ・ノース・オペラの共同制作
- ・ジャック・オッフエンバック作曲《青ひげ》
ザンクト・ペルテン祝祭劇場(オーストリア)とグレインジ・パーク・オペラ・フェスティバル(イギリス)
の共同制作

7. フェスティヴァル会場区域の再建

- 祝祭劇場(内装、外装)
- 新しいチケット・センター、ボックス・オフィス、レストランの設置
- リハーサル室、歌手や合唱団のための部屋の増設
- 湖上ステージの特別鑑賞席を増設(200 席)
- 国、州、市、ブレゲンツ音楽祭、ブレゲンツ音楽祭友の会が費用を負担
- 建築家:ヘルムート・ディートリッヒ Helmut Dietrich
ムーフ・ウンタートリファラー Much Untertrifaller
www.dietrich.untertrifaller.com

8. 結論

今日の音楽祭は、芸術を通じて日常生活を高揚させる——ファンタジーをかきたてる、いわば「くすり medicine」のような——場を多くの人々に提供していくべきである。

世界のオペラ・フェスティバル（オペラ上演を中心としたもの）

[ヨーロッパ]

国名	開催地	音楽祭名	開催日
アイルランド	ウェクスフォード	Wexford Festival Opera	2007年5月31日～6月17日
	キャスルウオード	Castleward Opera	2007年6月1日～24日
イギリス	ロングボロー	Longborough Festival Opera	2007年6月23日～7月28日
	アイフォード	Iford Arts	2007年6月23日～8月4日
	エディンバラ	Edinburgh International Festival	2007年8月10日～9月2日
	ガーシントン	Garsington Manor	2007年6月9日～7月9日
	グラインドボーン	Glyndebourne Festival Opera	2007年5月19日～8月26日
	ノーシングトン	Grange Park Opera	2007年5月31日～7月15日
	バクストン	Buxton Festival Opera	2007年7月6日～22日
	ロンドン	Opera Holland Park	2007年6月5日～8月11日
イタリア	ヴェローナ	Arena di Verona	2007年6月22日～9月1日
	トーレ・デル・ラーゴ	Festival Puccini	2007年7月20日～8月19日
	フィレンツェ	Maggio Musicale Fiorentino	2007年4月24日～6月30日
	ペーザロ	Rossini Opera Festival	2007年8月8日～21日
	マチェラータ	Sferisterio Festival Opera	2007年7月26日～8月12日
	ローマ	Terme di Caracalla	2007年7月17日～8月14日
オーストリア	ウィーン	Klangbogen Wien	2006年7月20日～8月20日
	エアル	Tiroler Festspiele Erl	2007年7月5日～28日
	ガルス・アン・カンブ	Opern Air Gars	2007年7月14日～8月12日
	クロースターノイブルク	Oper Klosterneuburg	2007年7月8日～8月2日
	ザルツブルク	Salzburger Festspiele	2007年7月27日～8月31日
	ザンクト・マルガレーテン	Opernfestspiele St. Margarethen	2007年7月12日～8月26日
	バート・イシュル	Lehar Festival	2007年7月14日～9月2日
	ブレゲンツ	Bregenz Festival	2007年7月18日～8月19日
	メルビッツシュ	Seefestspiele Moerbisch	2007年7月12日～8月26日
オランダ	ズヴォーレ	Nederlands Kameropera Festival	2007年4月13日～27日
スイス	ソロトゥルン	Classic Openair	2007年7月2日～14日
	チューリッヒ	Züricher Festspiele	2007年6月15日～7月8日
スペイン	ラ・コルナ	Festival Mozart	2007年5月17日～7月7日
	ラス・パルマス	Amigos Canarios de la Ópera	2007年2月17日～6月23日
ドイツ	アンデックス	Festival Orff	2007年6月15日～8月5日
	ヴィルトバート	Rossini in Wildbad	2007年7月11日～22日
	エアフルト	Domstufen-Festspiele	2007年8月11日～9月2日
	エウティン	Eutiner Festspiele	2007年7月13日～8月26日
	グート・イムリンク	Opernfestival Gut Immling	2007年6月22日～7月29日
	ハレ	Händel-Festspiele	2007年5月31日～6月10日
	パイロイト	Richard Wagner Festspiele	2007年7月25日～8月28日
	ミュンヘン	Münchner Opern-Festspiele	2007年6月30日～7月31日
	ラインスベルク	Kammeroper Schloß Rheinsberg	2007年6月30日～8月18日
	ルートヴィヒスブルク	Ludwigsburger Schlossfestspiele	2007年6月7日～8月5日

国名	開催地	音楽祭名	開催日
フランス	エクサン・プロヴァンス	Festival International d'Art Lyrique d'Aix-en-Provence	2007年6月28日～7月22日
	エ・レ・バン	Festival d'Operettes	2007年7月7日～30日
	ベルイル	Lyrique-en-Mer	2007年7月20日～8月17日
	ボージェ	Opéra de Baugé	2007年7月22日～8月4日
ベルギー	ビルツェン	Zomeropera Alden Biesen	2007年6月8日～7月8日

[東欧・ロシア・北欧]

国名	開催地	音楽祭名	開催日
スロヴェニア	リュブリャナ	Festival Ljubljana	2007年7月2日～9月1日
ハンガリー	ミシュコルツ	International Opera Festival Miskolc	2007年6月13日～24日
ロシア	サンクト・ペテルブルク	Stars of the White Nights	2007年5月18日～7月15日
スウェーデン	リドショーピング	Läckö Slottsopera	2007年7月7日～28日
	ストックホルム	Drottningholms Slottsteater	2007年5月26日～8月11日
ノルウェー	オスロ	Ultima Contemporary Music Festival	2006年9月28日～10月15日
	クリスティアンズン	Kuristiansund Opera	2007年2月8日～24日
フィンランド	サヴォンリンナ	Savonlinna Opera Festival	2007年6月29日～7月28日

[北米]

国名	開催地	音楽祭名	開催日
アメリカ	アスペン	Aspen Music Festival	2007年6月20日～8月19日
	アナンディル	Bard Summerscape	2007年7月5日～8月19日
	ウォルフ・トラップ	Wolf Trap Opera	2007年6月2日～8月18日
	グリーンマーグラス	Glimmerglass Opera	2007年7月7日～8月28日
	サンタ・フェ	Santa Fe Opera	2007年6月29日～8月25日
	シャーロットビル	Ash Lawn Opera Festival	2007年7月6日～8月12日
	シンシナティ	Cincinnati Opera	2007年6月14日～7月31日
	セントルイス	Opera Theatre of Saint Louis	2007年5月19日～6月24日
	チャールストンSC	Spoletto Festival USA	2007年5月25日～6月10日
	デンバー	Central City Opera	2007年6月30日～8月19日
	ローガン	Utah Festival Opera	2007年7月11日～8月11日

[その他] 特徴のあるオペラ・フェスティバル

国名	開催地	音楽祭名	開催日
イタリア	スポレート	Spoletto Festival	2007年6月29日～7月15日
	マルティナ・フランカ	Festival della Valle d'Italia	2007年7月19日～8月8日
ドイツ	バーデン・バーデン	Festspiele Baden-Baden	[秋]2006年10月3日～9日 [冬]2007年1月15日～21日 [聖霊降臨節] 2007年5月25日～6月3日 [夏]2007年7月6日～13日
フランス	オランジュ	Choregies d'Orange	2007年7月7日～8月3日

* 今回は便宜上、期間中にオペラあるいはオペレッタを10回以上、上演しているオペラ・フェスティバルを取り上げた。それ以外でも、特徴のあるオペラ・フェスティバルを最後に掲載した。

* 地域別に、開催地を50音順に並べた。

ブレゲンツ音楽祭 オペラ公演1 (1994~2006年)

"Spiel Auf dem See" --- Seebühne(雨天時 Festspielhaus)での公演

ブレゲンツ音楽祭-インテンダント(Geschäftsführung):1983~2003年 Alfred Wopmann, 2003年~ David Pountney

演目	日付	指揮	演出	舞台装置	衣装	照明	キャスト	備考
ナブッコ Nabucco G. ヴェルディ	1994年 7月21~23, 25, 27, 29, 30日 8月2, 3, 5~7, 9~22日	Ulf Schirmer/ Frédéric Chaslin	David Pountney	Stefanos Lazaridis	Sue Willmington	Davy Cunningham	Nabucco: Valeri Alexeev / Sergej Leiferkus / Thomas N. Potter / Mark Rucker Zaccaria: Csaba Arizer / John Cheek / Michail Krutikov Abigaille: Mariana Anghelowa / Rosalind Plowright / Lubica Rybarska / Jane Thorne-Mengedotht	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 Wiener Symphoniker 合唱:ウィーン・フォルクスオーパー合唱団 Chor der Volkssoper Wien, ソフィア室内合唱団 Kammerchor Sofia, ブレゲンツ音楽祭合唱団 Bregenzer Festspielchor (再演)
フィデルリオ Fidelio L. V. ベートーヴェン	1995年 7月21, 22, 24, 25, 28, 29, 31日 8月2, 4~6, 8~22日	Ulf Schirmer/ Frédéric Chaslin	David Pountney	Stefanos Lazaridis	Sue Willmington	Davy Cunningham	Leonore: Susan Anthony / Jane Thorne-Mengedotht / Gabriele Maria Ronge Florestan: Stig Andersen / Wolfgang Fassler / Sergej Larin / Jyrki Niskanen / Roland Wagenführer Don Pizarro: Richard Paul Fink / Pavlo Hunka / Alan Titus	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:ソフィア室内合唱団, モスクワ・ロン・ア・アカデミー合唱団 Chor der Russischen Akademie Moskau, ブレゲンツ音楽祭合唱団
ポーギーとベス Porgy and Bess G. ガーシュウィン	1996年 7月21~23, 25~27, 29, 31日 8月2, 3, 6, 8~11, 13~ 18, 20~22日	Ulf Schirmer/ Frédéric Chaslin	David Pountney	Stefanos Lazaridis	Sue Willmington	Davy Cunningham	Leonore: Susan Anthony / Renate Behle / Evelyn Herltzius / Jane Thorne-Mengedotht Florestan: Wolfgang Fassler / Roland Wagenführer / Glenn Winslade Don Pizarro: Jürgen Freier / Pavlo Hunka / Elke Wilim Schulte	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:ソフィア室内合唱団, モスクワ・ロン・ア・アカデミー合唱団 (再演)
ポーギーとベス Porgy and Bess G. ガーシュウィン	1997年 7月18, 19, 21~23, 25, 26, 29, 30日 8月1~3, 5~10, 12~ 20日	Andrew Litton/ Wayne Marshall	Götz Friedrich	Hans Schavermoch	Sue Willmington	Jean Kalman	Porgy: Donnie Ray Albert / Gordon Hawkins / Arthur Woodley Bess: Cynthia Haymon / Marquita Lister / Myra Merritt	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:ハーレム・シンガーズ Harlem Singers ダンス:キャットフィッシュ・ロウ・ダンサーズ Catfish-Row Dancers(振付:Tanya Gibson-Clark) 演奏:ステージ・バンド Stageband
ポーギーとベス Porgy and Bess G. ガーシュウィン	1998年 7月17, 18, 20, 21, 24, 25, 27, 28, 31日 8月1~5, 7~18日	Andrew Litton/ Wayne Marshall	Götz Friedrich	Hans Schavermoch	Sue Willmington	Jean Kalman, Peter Halbsgut	Porgy: Donnie Ray Albert / Gordon Hawkins / Arthur Woodley Bess: Morenike Fadayomi / Marquita Lister / Myra Merritt	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:ハーレム・シンガーズ Harlem Singers ダンス:キャットフィッシュ・ロウ・ダンサーズ Catfish-Row Dancers(振付:Tanya Gibson-Clark) 演奏:アフリカ・ドラマーズ African Drummers, ステージ・バンド (再演)
仮面舞踏会 Ein Maskenball G. ヴェルディ	1999年 7月21~24, 27, 28, 30, 31日 8月3, 4, 6~8, 10~22 日	Marcello Viotti/ Lodovico Zocche	Richard Jones, Anthony McDonald	Richard Jones, Anthony McDonald		Wolfgang Göbbel	Gustav III., König von Schweden: Stephen O'Mara / David Rendall / Rafael Rojas René, Graf von Ankarström: Lado Ataneli / Pavlo Hunka / Philippe Rouillon Amelia: Jeanne-Michèle Charbonnet / Susan Neves / Elizabeth Whitehouse	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:モスクワ室内合唱団 Kammerchor Moskau, ブレゲンツ音楽祭合唱団 振付: Philippe Giraudeau ブラスバンド:フォアアールベルク・ブラス・オーケストラ Symphonisches Blasorchester Vorarlberg
仮面舞踏会 Ein Maskenball G. ヴェルディ	2000年 7月21, 22, 24, 25, 28, 29, 31日 8月2, 4~6, 8~15, 17~ 20日	Marcello Viotti/ Lodovico Zocche	Richard Jones, Anthony McDonald	Richard Jones, Anthony McDonald		Wolfgang Göbbel	Gustav III., König von Schweden: Marco Berti / Stephen O'Mara / Rafael Rojas Jean Jacques René: Pavlo Hunka / Stephan Pytynchko / Jacek Strauch Amelia: Kathleen Broderick / Iano Tamar / Elizabeth Whitehouse	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:モスクワ室内合唱団, ブレゲンツ音楽祭合唱団 ダンス:ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル Tanzensemble der Bregenzer Festspiele(振付: Philippe Giraudeau) ブラスバンド:フォアアールベルク・ブラス・オーケストラ (再演)
ラ・ボヘーム La Bohème G. プッチーニ	2001年 7月19~21, 25, 27, 28, 31日 8月2~4, 6~21日	Ulf Schirmer/ Lodovico Zocche	Richard Jones, Anthony McDonald	Richard Jones, Anthony McDonald	Co-Design: Emma Ryott	Wolfgang Göbbel	Mimi: Yvonne Gonzales, Mary Plazas, Alexia Voulgaridou Rodolfo: Alfredo Portilla, Rafael Rojas, Rolando Villazon Marcello: Daniel Broad, Marcin Bronikowski, Ludovic Tézier Musetta: Eria Kollaku, Stefanie Krahnemfeld, Heidi Person 助演:ハイエルン演劇アカデミー Bayerische Theaterakademie August Everding München, ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル(振付: Philippe Giraudeau)	会場:湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:モスクワ室内合唱団, ブレゲンツ音楽祭合唱団, プレンツ音楽学校児童合唱団 Kinderchor der Musikhauptschule Bregenz 助演:ハイエルン演劇アカデミー Bayerische Theaterakademie August Everding München, ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル(振付: Philippe Giraudeau)

ブレゲンツ音楽祭 オペラ公演2 (1994~2006年)

項目	日付	指揮	演出	舞台装置	衣裳	照明	キャスト	備考
ラボエーム La Bohème G. プッチーニ	2002年 7月18~20, 23, 24, 26, 27, 30, 31日 8月2~4, 6~11, 13~ 18日	Ulf Schirmer/ Christian von Gehren	Richard Jones, Anthony McDonald	Richard Jones, Anthony McDonald	Co-Design: Emma Ryott	Wolfgang Göbbel	Mimi: Mary Plazas, Virginia Tola, Alexia Voulgaridou Rodolfo: Joseph Calleja, Alfredo Portilla, Rolando Villazon Marcello: Daniel Broad, Hernan Iturralde, Ludovic Tézier Musetta: Malin Byström, Stefanie Krahnertfeld, Elena de la Merced	会場: 湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団、ブレゲンツ音楽祭合唱団、ブレゲンツ音楽学校児童合唱団 助演: ハイエルン演劇アカデミー、ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル(振付: Philippe Graudeau)
ウエスト・サイド・ストーリー West Side Story L. ハーンスタイン	2003年 7月17~19, 22, 23, 25, 26, 29, 30日 8月1~19日	Wayne Marshall / David Charles Abell	Francesca Zambello	George Tsylin	Marie-Jeanne Lecca	James F. Ingalls	Riff: Alexander Franzen / Jochen Schmittke Tony: Christian Baumgärtel / Mark Tevis / Jesper Tydén Bernardo: Reynaldo Rodriguez / Andreas Wolfram Maria: Marisol Montalvo / Katja Reichert Anita: Katharina Schutz / Sibylle Wolf	会場: 湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団(指揮: Vladimir Minin) 助演: ハイエルン演劇アカデミー ダンス: ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル(振付: Richard Whierlock)
ウエスト・サイド・ストーリー West Side Story L. ハーンスタイン	2004年 7月20日~8月21日	Wayne Marshall / David Charles Abell	Francesca Zambello	George Tsylin	Marie-Jeanne Lecca	James F. Ingalls	Riff: Alexander Franzen / Jochen Schmittke Tony: Christian Baumgärtel / Mark Tevis / Jesper Tydén Bernardo: Reynaldo Rodriguez / Andreas Wolfram Maria: Marisol Montalvo / Katja Reichert Anita: Katharina Schutz / Sibylle Wolf	会場: 湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団(指揮: Vladimir Minin) 助演: ハイエルン演劇アカデミー ダンス: ブレゲンツ音楽祭ダンス・アンサンブル(振付: Richard Whierlock)
イルトロヴァトーレ Der Troubadour G. ヴェルディ	2005年 7月22~24, 27~31日 8月3~7, 9~15, 17~ 21日	Fabio Luisi/ Thomas Rösner	Robert Carsen	Paul Steinberg	Miruna Boruzescu	Patrick Woodroffe	Marrico, Der Troubadour: Zvetan Michailov, Alfredo Portilla, Dario Volonté Il Conte di Luna: Scott Hendricks, Željko Lučić, George Petean Leonore, Hoffdame: Katja Pellegrino, Sondra Radvanovsky, Tatjana Serjan Azucena, Eine Zigeunerin: Marianne Cornetti, Larissa Diadkova, Patrizia Patelmo	会場: 湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団、ブレゲンツ音楽祭合唱団 振付: Philippe Graudeau
イルトロヴァトーレ Der Troubadour G. ヴェルディ	2006年 7月20~23, 25~29日 8月3~6, 9~13, 15, 16, 18~20日	Fabio Luisi/ Thomas Rösner	Robert Carsen	Paul Steinberg	Miruna Boruzescu	Patrick Woodroffe	Marrico, Der Troubadour: Zvetan Michailov, Carl Tanner, Arnold Rawls Il Conte di Luna: Scott Hendricks, Željko Lučić, George Petean Leonore, Hoffdame: Katja Pellegrino, Iano Tamar, Annalisa Raspagliesi Azucena, Eine Zigeunerin: Marianne Cornetti, Larissa Diadkova, Patrizia Patelmo, Ljubov Sokolova	会場: 湖上ステージ / 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団、ブレゲンツ音楽祭合唱団 振付: Philippe Graudeau

Festspielhaus, Theater am Kormmarkt, Werkstattbühneでの公演

項目	日付	指揮	演出	舞台美術	衣裳	照明	キャスト	備考
フランチェスカ・ダ・リミニ Francesca da Rimini R. サンドナーイ	1994年 7月20, 24, 28, 31日 8月4日	Fabio Luisi	Robert Fortune	Anthony McDonald		Wolfgang Göbbel	Francesca: Elena Filipova Samaritana: Hana Minutillo Ostasio: Danilo Rigosa Giovanni: Philippe Rouillon Paolo der Schöne: Frederic Kalt	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: ウィーン・フォルクスオーパー合唱団、ソフィア室内合唱団
見えざる町 キーティと魔法 フェローニヤの物語 Die Legende von der unsichtbaren Stadt Kitesch und von der Jungfrau Fevronija N. A. リムスキー=ニコルサコフ	1995年 7月20, 23, 27, 30日 8月3日	Vladimir Fedoseyev	Harry Kupfer	Hans Schavemoch	Reinhard Heinrich	Franz Peter David	Fürst Juri Wsewolodowitsch: Pawel Daniljuk Prinz Wsewolod Jurjewitsch: Sergej Naida Fevronija: Elena Prokina Grischka Kutjerma: Wladimir Galusin Fjodor Pojzrok: Samson Isumow	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: ソフィア室内合唱団、モスクワ・ロシア・アカデミー合唱団 (ペーリリン・コーミッシェ・オーパーとの共同制作)
三文オペラ Die Dreigroschenoper K. ヴェーデル	1995年 8月5~7日	Frank Raschke	Alexander Lang	Volker Prüfler			Jenny, Margit Bendokat Polly, ihre Tochter: Johanna Schall Macheath: Jörg Gudrun Frau Peachum: Gudrun Ritter Moritatensänger: Reimar Joh. Baur	会場: コルマルクトアター - Kommarkttheater オーケストラ: Das Orchester "Vielharmonie"

ブレゲンツ音楽祭 オペラ公演3 (1994~2006年)

演目	日付	指揮	演出	舞台美術	衣裳	照明	キャスト	備考
アルテュス王 Le Roi Artus E. ショーゾン	1996年 7月20, 24, 28日 8月1, 4日	Marcello Viotti	Günter Krämer	Herbert Kappelmüller	Herbert Kappelmüller	Max Keller	Genièvre: Susan Anthony Arthus: Philippe Rouillon Lancelot: Douglas Nasrawi / Paul Lyon Mordred: Evgenij Damerdjiev Lyonnell: Octavio Arévalo	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: ソフィア室内合唱団、モスクワ・アカデミー合唱団 (オーストリア初演)
デーモン Der Dämon A. ルビンシュタイン	1997年 7月17, 20, 24, 27, 31 日	Vladimir Fedoseyev	Neil Armfield	Carl Friedrich Oberle	Anette Mauet Oberle	Nigel Levings	Dämon: Egils Silins / Stephan Pyrychko Engel: Olga Alexandrova Tamaras: Marina Mescheriakova Tamaras Amme: Alexandra Durseneva Prinz Sinodal: Ilya Levinsky	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団、ソフィア室内合唱団 振付: Ross Coleman (チューリッヒ歌劇場との共同制作)
3人の王様の恋 L'amore dei tre re I. モンテメッツィ	1998年 7月16, 19, 22, 26, 29 日	Vladimir Fedoseyev	Philippe Ariaud	Philippe Ariaud	Annette Beaufays	Philippe Ariaud	Fiora: Denia Mazzola-Gavazzeni Archibaldo: Kurt Rydl Manfredo: Stephan Pyrychko Avito: Marcus Haddock Flaminio: Douglas Nasrawi	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: ブレゲンツ音楽祭合唱団、モスクワ室内合唱団
夜 G. F. ハース	1998年 8月7, 8日	Peter Rundel	Philippe Ariaud	Philippe Ariaud	Andrea Uhmann	Philippe Ariaud	Sop.: Julie Moffat M. Sop.: Annette Sticker Ten.: Martyn Hill Bar.: Wolfgang Bankl Sprecher: Georg Nigl Bass: Johannes Schmidt	会場: ヴェルクシュタットビューネ オーケストラ: ウィーン交響楽団 (ブレゲンツ音楽祭委嘱作品、舞台初演)
ギリシャの受難劇 Griechische Passion B. マルティヌス	1999年 7月20, 25, 29日 8月1, 5日	Ulf Schirmer	David Pountney	Stefanos Lazandis	Marie-Jeanne Lecca	Davy Cunningham	Priester Grigoris: Esa Ruutuinen Patriarchas Archon: Eric Garrett Manolios: Christopher Ventris Yannakos: John Daszak Panalt: Douglas Nasrawi	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団、ブレゲンツ音楽学校児童合唱団 (第1類初演、ロイヤル・オペラ・ハウス・ハウス・コヴェンツとの共同制作)
アンネの日記 Das Tagebuch der Anne Frank G. フリード	1999年 8月7, 8日	Nir Kabaretti	Erwin Pipilits	Erwin Pipilits	Ulrike Kaufmann		Anne Frank: Anat Efraty	会場: ヴェルクシュタットビューネ オーケストラ: Bühnenorchester der Österreichischen Bundestheater 振付: Anne Maria Gros (モノオペラ)
金鱗 Der goldene Hahn N. リムスキー=コルサコフ	2000年 7月20, 23, 27, 30日 8月3日	Vladimir Fedoseyev	David Pountney	Huntley Muir		Mimi Jordan Sherin	König Dodon: Kurt Rydl Prinz Gwidon: Robert Worle Prinz Afron: Adrian Clarke General Polkan: Walter Fink	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団 ダンス: ダンス・アンサンブル Tanzensemble(振付: Amir Hosseinpour)
マリアス・アイレスのマリア María de Buenos Aires A. ピアソラ	2000年 8月1, 3, 4日	Gidon Kremer	Philippe Ariaud	Philippe Ariaud	Andrea Uhmann	Philippe Ariaud	Maria: Julia Zenko El Duende: Facundo Ramirez Un Porteño: Gerardo Baamonde Payador: César A. Gutiérrez Maria (als Kind): Franca Zitta	会場: ヴェルクシュタットビューネ 音楽: クレメラ・タムジカ Kremer/ATA Musica 振付: Anne Marie Gros (第1類オーストリア初演、Klangbogen Wien との共同制作)
甘日麗と人間 Of Mice and Men C. フロイド	2001年 7月18, 22, 26, 29日 8月1日	Patrick Summers	Francesca Zambello	Richard Hudson	Richard Hudson	Wolfgang Göbbel	George Milton: Gordon Hawkins Lennie Small: Anthony Dean Griffey Curley: Joseph Evans Candy: Julian Patrick Curleys Frau: Nancy Allen Lundy	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団 (オーストリア初演、ビューネ・コンサート・オペラとの共同制作)
カンパニー Company S. ソンドハイム	2001年 7月28, 29日	Basil Coleman	Stefan Huber	Harald B. Thor	Susanne Hubrich	Andreas Grüter	Robert: Felix Powroslo Harry: Karsten Oliver Wöllm Sarah: Alexandra Seefisch Amy: Carolin Soyka Joanne: Nicole Johannhanwehr	会場: ヴェルクシュタットビューネ オーケストラ: ウィーン交響楽団 振付: Ramses Sigi (K&Kミュージカル、バイエルン演劇アカデミー、Hochschule für Musik und Theater München の4年次生の修了公演)
ジュリエッタ Julietta B. マルティヌス	2002年 7月17, 21, 25, 28日 8月1日	Dietfried Bernet	Katja Czelnik	Vera Bonsen	Vera Bonsen	Wolfgang Göbbel	Juliette: Eva-Maria Westbroek Michel: Johannes Chum Kommisar / Waldhüter / Beamter: Eberhard Francesco Lorenz Mann mit Helm / Händler mit Erinnerungen / Bettler / Mann mit Schiff: Matteo de Monti	会場: 祝祭劇場 オーケストラ: ウィーン交響楽団 合唱: モスクワ室内合唱団より声員3名、ブレゲンツ音楽祭合 唱団、コルマンクット合唱団 Kommarktchor

ブレゲンツ音楽祭 オペラ公演4 (1994~2006年)

項目	指揮	演出	舞台美術	衣裳	照明	キャスト	備考
利己な女狐の物語 Das schlaue Fuchslin L. ヤナーチェク	Vladimir Fedoseyev	Daniel Slater	Robert Innes Hopkins	Simon Mills	Der Förster: Peter Coleman-Wright Die Frau Försterin Ildiko Szonyi Der Schulmeister: Stefan Margita Der Pfarrer: Brian Bannatyne-Scott Harašta: Wolfgang Bankl	指揮: 祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:モスクワ室内合唱団、プラハ・フィルハーモニー児童合唱団 Prager Philharmonischer Kinderchor 振付:Aletta Collins	
人間の声 La Voix humaine F. プーランク	Christoph Eberle	Frank Hilbrich	Raum: Hugo Gretler	Wolfgang Göbbel	Die Stimme: Barbara Friebe	会場:コルンマルクトテアター オーケストラ:フォアアールベルク交響楽団 Symphonieorchester Vorarlberg	
Die schöne Wunde G. F. ハース	Sylvain Cambreling	Szenische: Hermann Feuchter Rauminstallation: Wolfgang Göbbel	Szenische: Hermann Feuchter Rauminstallation: Wolfgang Göbbel	Gefangener: Georg Nigl Landarzt: Johannes Schmidt	会場:ヴェルクシュタットピユーネ 演奏:Klangforum Wien, Ensemble Nova (KAZオペラ、ブレゲンツ音楽祭委嘱作品、初演)		
立役者 / ロイヤル・パレス Der Protagonist / Royal Palace K. ヴァイル (2本立て)	Yakov Kreizberg	Nicolas Brieger	Raimund Bauer	Alexander Koppelmann	Solisten: Catherine Naglestad, Otto Katzmeier, Gerhard Siegel, Peter Bordling	会場:祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団	
牛売り Der Kuhhandel K. ヴァイル	Christoph Eberle	David Pountney	Duncan Hayler	Margit Koppelmann	Solisten: Natalya Kovalova, Alexander Kaimbacher, Johannes Martin Kränze	会場:コルンマルクトテアター オーケストラ:フォアアールベルク交響楽団	
仮面舞踏会 Maskerade C. ニールセン	Ulf Schirmer	David Pountney	Johan Engels	Marie-Jeanne Lecca	Jeronimus, Bürger zu Kopenhagen: Günter Missenhardt Magdeline: Seine Frau: Julia Juon Leander, Sein Sohn: Daniel Kirch Henrik, Leanders Diener: Markus Brück との共同制作	会場:祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団 合唱:モスクワ室内合唱団 振付: Renato Zanella (ドイツ語上演、ロイヤル・オペラ・ハウス・ハウス・コヴェント・ガーデンとの共同制作)	
情けな戦争 Der Lustige Krieg J. シュトラウス II	Dietfried Bernet	Michael Sturminger	Andreas Donhauser, Renate Martin	Andreas Donhauser, Renate Martin	Violetta: Alexandra Reinprecht Umberto Spinola: Stephan Rügamer Marchese Sebastiani: Carsten Süss Else: Claudia Rohrbach Franchetti: Klaus Kuttler U. A.	会場:コルンマルクトテアター オーケストラ:フォアアールベルク交響楽団 合唱:ブレゲンツ音楽祭合唱団 (ウィーン・フォルクスオーパーとの共同制作)	
Der Siebte Himmel in Viertel M. Nagl	Alexander Drcair	Michael Scheidl	Nora Scheidl	Adam Silverman	Solisten: Scott Hendrichs, Nicholas Cavallier, John Graham-Hall	会場:ヴェルクシュタットピユーネ オーケストラ:ウィーン交響楽団 (KAZオペレッタ、Netzzeit Wien との共同制作)	
アッシャー家の崩壊 Der Untergang des Hauses Usher C. F. エッジンジャー	Lawrence Foster	Phyllida Lloyd/ Kim Brandstrup	Richard Hudson	Chris Davey	Solisten: Wolfgang Ablinger-Sperrhacke, Robert Wörle, Daniela Fally, Daniel Behle	会場:祝祭劇場 オーケストラ:ウィーン交響楽団	
Radek R. Dunser	Walter Kobera	Gil Mehmert	Steff Bruhn	Radek: Georg Nigl Bernhard Landauer	会場:ヴェルクシュタットピユーネ 演奏:ウィーン・コンサート協会 Wiener Concert-Verein		
誓ひ Blaubart J. オッフェンバック	Martin André Langridge	Stephen Langridge	George Souglides	Chris Davey	Solisten: Wolfgang Ablinger-Sperrhacke, Robert Wörle, Daniela Fally, Daniel Behle	会場:コルンマルクトテアター オーケストラ:フォアアールベルク交響楽団 振付: William Tuckett	

<ブレゲンツ音楽祭>にて1シーズンで行われる公演

例：2003年7月16日～8月19日

湖上ステージ (Seebühne)

- オペラ (7月17～19、22、23、25、26、29、30日、8月1～19日)
L. バーンスタイン作曲 《ウェスト・サイド・ストーリー》
—West Side Story—
オーケストラ ウィーン交響楽団
指揮 Wayne Marshall / David Charles Abell
演出 Francesca Zambello
振付 Richard Wherlock
舞台装置 George Tsypin
衣裳 Marie-Jeanne Lecca
照明 James F. Ingalls

祝祭劇場 (Festspielhaus)

- オペラ (7月16、20、24、27、31日)
L. ヤナーチェク作曲 《利口な女狐の物語》
—Das schlaue Fuchslein— (原題：Příhody Lišky Bystroušky)
オーケストラ ウィーン交響楽団
指揮 Vladimir Fedoseyev
演出 Daniel Slater
振付 Aletta Collins
照明 Simon Mills
- ウィーン交響楽団コンサート (7月21日)
指揮 Vladimir Fedoseyev
ソリスト Marina Mescheriakova, ソプラノ
Zoran Todorovich, テノール
曲目 S. プロコフィエフ作曲 バレエ音楽《ロメオとジュリエット》序曲
—Ouverture zu “Romeo und Julia” —
P. I. チャイコフスキー作曲 オペラ《ロメオとジュリエット》より二重唱
—Duett “Romeo und Julia” aus der gleichnamigen Oper—
J. ブラームス作曲 《愛の歌》op. 52
—Liebeslieder op. 52—

- ウィーン交響楽団コンサート (7月28日)
指揮 Jukka-Pekka Saraste
ソリスト Petra Lang, メソ・ソプラノ
曲目 R. Dünser 作曲 《The waste land》 [世界初演]
B. バルトーク作曲 バレエ音楽《木製の王子》
—Der holzgeschnittene Prinz—
J. シベリウス作曲 Orchesterlieder
M. ラヴェル作曲 《ダフニスとクロエ》組曲第2番
—“Daphnis et Chloé” Suite Nr. 2—

- ウィーン交響楽団コンサート (8月4日)
指揮 Marcello Viotti
ソリスト Rudolf Buchbinder ピアノ
曲目 J. ブラームス作曲 ピアノ協奏曲第1番ニ短調 op. 15
—Klavierkonzert Nr. 1 d-moll, op. 15—
A. オネゲル作曲 交響曲第3番「典礼風」
—Symphonie liturgique—
O. メシアン作曲 キリストの昇天
—L'Ascension —

- ウィーン交響楽団コンサート (8月10日)
指揮 Ulf Schirmer
ソリスト Florian Zwiauer ヴァイオリン
曲目 L. v. ベートーヴェン作曲 ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 61
—Konzert für Violine und Orchester D-Dur, op. 61—
A. ブルックナー作曲 交響曲9番ニ短調
—9. Sinfonie Nr. 3 d-moll—

- ボーゼントリエント・ハイドン・オーケストラ、フォアアールベルク交響楽団
コンサート (8月15日)
合唱 Kornmarkchor
Kinderchor der Musikhauptschule Bregenz
指揮 Christoph Eberle
曲目 G. マーラー作曲 交響曲3番ニ短調
—Sinfonie Nr. 3 d-moll—

コルンマルクトテアター (Kornmarkttheater)

- 歌曲・オペラ (7月30日、8月1日)
L. ヤナーチェク作曲 《消え去った男の日記》
—Tagebuch eines Verschollenen— (原題：Zápisník zmizelého)
F. プーランク作曲 《人間の声》—La Voix humaine—
オーケストラ フォアアールベルク交響楽団
指揮 Christoph Eberle
演出 Frank Hilbrich
空間デザイン Hugo Gretler
照明 Wolfgang Göbbel

マルツイン広場 (Martinsplatz)

- 演劇 (8月8～10、12～16日)
W. シェイクスピア作 《尺には尺を》
—Maß für Maß— (原題：Measure for Measure)
演出 Christian Himmelbauer
美術 Manuela Müller
※フォアアールベルク劇場との共同制作

マルツイン広場/祝祭ホール

(Martinsplatz / Festsaal, Gösserbräu Bregenz)

- ウィーン交響楽団によるヨハン・シュトラウス・アンサンブル
コンサート (7月18日)
指揮 Johannes Wildner
—Der Walzerkönig—

- ウィーン交響楽団によるヨハン・シュトラウス・アンサンブル
コンサート (7月25日)
指揮 Johannes Wildner
—Ein Wiener Dynastie · Die Familie Strauß—

聖マルツイン教区教会 (Pfarrkirche St. Martin, Dornbirn)

- オルガン・リサイタル—Orgelrecital in fis— (7月24日)
ソリスト Bruo Oberhammer (オルガン)
曲目 M.レーガー、D.ブクステフーデ、S.カルク=エーラトの作品

マリア・ビルトシュタイン教会 (Kirche Maria Bildstein)

- ウィーン交響楽団によるバロック・アンサンブル
コンサート (8月3日)
指揮 Christian Birnbaum
曲目 G.トレッリ、A. ヴィヴァルディ、G. B. ベルゴレージ、
J. J. フックス、J. S. バッハの作品

KAZ「同時代の芸術」(KAZ [Kunst aus der Zeit])

ヴェルクシュタットビューネ (Werkstattbühne)

●オペラ (8月14、16日)

G. F. ハース作曲 《Die schöne Wunde》

指揮 Sylvain Cambreling

美術 Hermann Feuchter, Wolfgang Göbbel

演奏 Klangforum Wien

●演劇 (7月23、24日)

S. ベケット作

《Nacht und Träume: Der Verwaiser Beckett. Lesen》

演出 Dimiter Gotscheff

舞台装置 Thomas George

衣裳 Barbara Aigner

音楽 Philipp Haagen

※Thalia Theater Hamburg との共同制作

●演劇 (7月26、27日)

A. オースターマイヤー作 《Auf Sand》 [オーストリア初演]

演出 Martin Kušej

舞台装置 Christin Vahl

衣裳 Justina Klimczyk

音楽 Bert Wrede

※Thalia Theater Hamburg で+も公演

●余韻/夜の音楽—Nach[t] Klänge— (8月2日)

Peter Herbert の肖像—Porträtkonzert Peter Herbert—

演奏 Koehne Quartett、Ensemble SurPlus

作曲・指揮・ソリスト Peter Herbert

ソリスト Friedrich Kleinhapl

●余韻/夜の音楽—Nach[t] Klänge— (8月5日)

Wolfram Schurig の肖像—Porträtkonzert Wolfram Schurig—

演奏 Ensemble SurPlus

曲目 Wolfram Schurig の作品

●余韻/夜の音楽—Nach[t] Klänge— (8月7日)

The Untold Story—81 Minutes in Dallas

演奏 Thomas Dézsy (ヴィデオ、ライブ・エレクトロニクス・パフォーマンス)

Sophie Cwikla (カメラ)

●映画 (7月31日)

This is only the beginning—Retrospektive David Fincher

放映作品 《ゲーム》—The Game—

《ファイト・クラブ》—Fight Club—

《パニック・ルーム》—Panic Room—

●コンサート (8月6日)

The Cordoba Project!

Triology feat. W. Muthspiel und G. Breinschmid

●コンサート (8月13日)

Morton Feldman: For Samuel Beckett

指揮 Sylvain Cambreling

演奏 Klangforum Wien

ブレゲンツ芸術の家(Kunsthau Bregenz)

●余韻/夜の音楽—Nach[t] Klänge— (8月1日)

ウィーン・コンサート協会 I

演奏 Koehne Quartett

曲目 R. Dünser, G. Amann, M. Amann, M. Floredo, Volker Plangg の作品

●余韻/夜の音楽—Nach[t] Klänge— (8月9日)

ウィーン・コンサート協会 II

指揮 Christian Schulz

ソリスト Ji-Yeon Woo

曲目 M. Amann, M. Buchrainer, J. Doderer, G. Futscher の作品
(初演含む)

●コンサート (8月8日)

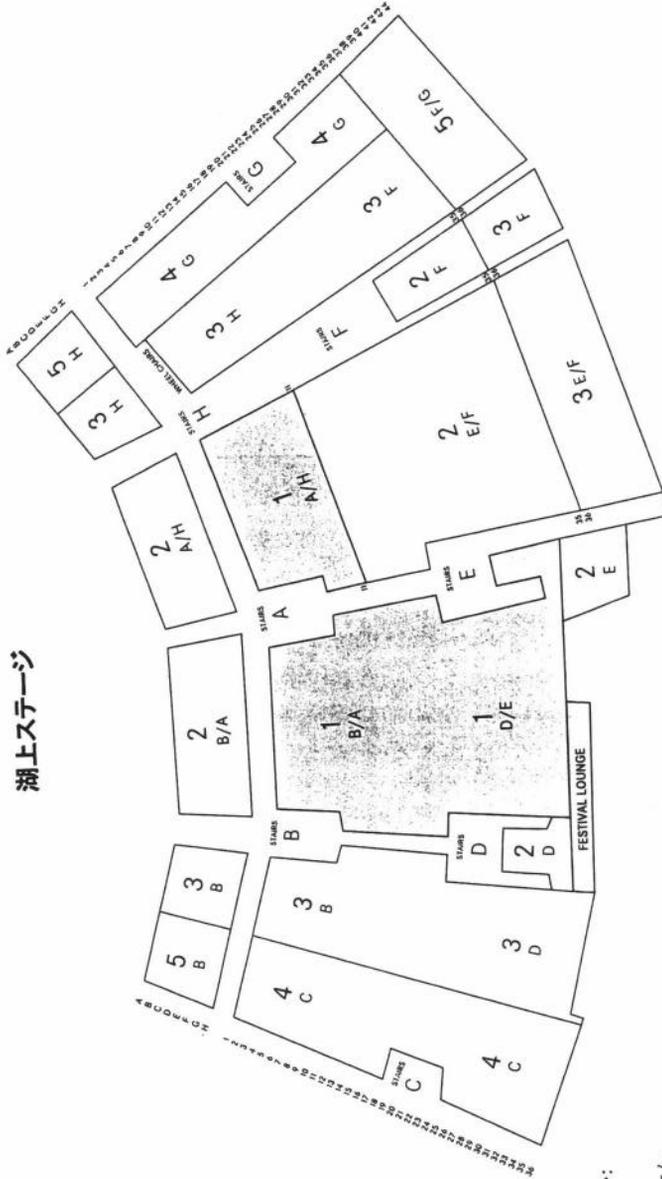
Ingeborg Baldaszi plays D'Almeida

曲目 F. リスト、A. V. D'Almeida の作品



FLOATING STAGE
TOSCA

湖上ステージ



荒天時のチケットの取り扱い

〜野外上演のキャンセルあるいは屋内上演の場合

カテゴリー1、フェスティヴァル・ラウンジ、プレミアム・チケット：
湖上上演が中止されたり、90分以内に取りやめた場合、
チケットは祝祭劇場での上演に有効で、返金いたしません。

カテゴリー2から5のチケット：

湖上上演にのみ有効です。祝祭劇場での上演に
変更される場合、湖上上演が全く行われないか、
60分以内に中止された場合、チケット所有者には、
全額返金します。ブレゲンツ音楽祭の方針は、
たとえ天候が荒れていても、湖上上演を続ける
ことです。小雨程度であれば湖上ステージで上演
しますので、鑑賞を妨げ、音響に悪影響を及ぼす
傘ではなく、レインコートなどをお持ちいただく
よう、お願いいたします。

PRICES: TOSCA

CATEGORY	SUN TO THUR		FRI AND SAT	
	EUR	CHF	EUR	CHF
1	106	172	125	202
2	86	139	105	170
3	66	107	86	139
4	46	75	66	107
5	26	42	46	75
PREMIUM-TICKET	160	259	175	284
FESTIVAL-LOUNGE	240	389	255	413

2006年10月発売開始

BREGENZER FESTSPIELE GMBH
P.O. BOX 311
6901 BREGENZ
T +43 5574 407-6
F +43 5574 407-400
WWW.BREGENZERFESTSPIELE.COM

**出演者
プロフィール**

プロフィール

エヴァ・クライニッツ Eva Kleinitz

(ブレゲンツ音楽祭オペラ監督 Bregenz Festival, Director of Opera)

ドイツ、ハノーファー近郊ランゲンハーゲン生まれ。ザールラント大学で音楽学、発達心理学、イタリア文学を修め、芸術学修士号を取得。プライベートでヴォイス・レッスンも受ける。国際ワーグナー協会ハノーファー支部の奨学金を受け、ボランティア活動とアシスタント・プロデューサーの仕事を行って行く。ローマ、ロヴェレート、パリ、ミラノで研究活動を行い、その成果を修士論文『リッカルド・ザンドナーイ《フランチェスカ・ダ・リミニ》～不当に上演されないオペラの一例として』にまとめた。

以後、ブレゲンツ音楽祭やクラゲンフルト、アヴィニョン、ニーム、パリ、ストラスブール、スポレート、ケルンなどでアシスタント・ディレクターとして国際的な演出家と協働。フランス語、英語、イタリア語への翻訳、共同制作する団体との作業、歌手への言語指導も行い、入門者用のマチネや講演、成人向けの音楽・演劇に関する講座を通して、芸術・音楽教育にも携わる。

1998年9月から、ブレゲンツ音楽祭の芸術部門に勤務。湖上ステージおよび祝祭劇場でのオペラ上演のプロジェクト管理、キャスティング、ドラマトゥルグ、契約、オペラ・ワークショップの計画、演目決定、共同制作に関わり、芸術監督アルフレッド・ウオプマン (Alfred Wopmann) の個人的なアシスタントも務めた。その他、ザンクト・ガレン、シュヴェツィンゲン、インスブルック、〈ハノーファー万博 2000〉のドラマトゥルグとコンセプト構想の分野における、フィリップ・アルロー (Philippe Arlaud) との共同作業がある。

芸術監督アルフレッド・ウオプマンの個人アシスタントを務めたまま、2000年1月にブレゲンツ音楽祭の芸術運営部門長に就任した。ブレゲンツ音楽祭は国際的な賞賛を獲得し、いくつもの新しい共同制作が始められた。2001年3月には《ギリシャの受難劇》がローレンス・オリヴィエ賞の「2000年ベスト・プロダクション」に選ばれた。2001年と2002年には、若い歌手のトリプル・キャストによる、湖上での《ラ・ボエーム》を成功に導いた。

2003年1月から2006年9月までは、新インテンダント、デイヴィッド・パウントニー (David Pountney) のもと、オペラ監督および芸術監督代理を務め、芸術的分野、キャスティング、契約、制作計画の責任者を務めた。このときの主なプロダクションとして《仮面舞踏会》《イル・トロヴァトーレ》《アッシャー家の没落》などが挙げられる。

2006年11月からはベルギー王立モネ劇場の芸術企画・制作監督、および新芸術監督ペーター・デ・カルヴェ (2007年より新体制) の補佐に就任する。

プロフィール

黒田 恭一 (くろだ きょういち)

音楽評論家。

1938年生まれ。早稲田大学在学中から雑誌・新聞への執筆を始め、以後音楽専門誌のみならず、一般誌での連載を多数担当。ラジオ、テレビ等の音楽番組解説者としても活躍。現在はBunkamura オーチャードホールのプロデューサーをつとめるなど、その活動は多岐にわたる。

クラシック・ファンの裾野を広げる活動に精力を注ぎ、幅広い層からの支持と信頼を獲得している。主な著書に『オペラへの招待』（朝日文庫）、『はじめてのクラシック』（講談社現代新書）、『ぼくのオペラノート』（東京書籍）、『水のように音楽を』（新潮社）、『ぼくだけの音楽』（主婦の友社）、『ぼくのオペラへの旅』（JTB）などがある。

プロフィール

寺倉 正太郎 (てらくら しょうたろう)

オペラ評論家。

著書に『オペラの力』（青弓社）。編著書に『ワーグナーの力』（青弓社）。

共訳書に『ワーグナーとは何か』（ブライアン・マギー著、葉月陽子共訳、音楽之友社）。共著に『オペラ・ハンドブック』（三省堂）、『オペラ大爆発!』（青弓社）ほか。

ドイツ語圏のオペラ事情を研究。ゲッツ・フリードリヒ、ハリー・クプファー、ペーター・コンヴィチエニーらの演出ノートの翻訳をはじめ、多くの来日公演プログラムで執筆・翻訳を担当。

プロフィール

石田 麻子 (いしだ あさこ)

東京芸術大学音楽学部卒業後、ドイツの音楽出版・ショット社の日本法人に勤務。

東京芸術大学大学院音楽研究科修了。

昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員を経て、

昭和音楽大学専任講師。

日本オペラ団体連盟発行『日本のオペラ年鑑』編纂委員。

学術博士。

〔著書〕

『日本のオペラ作品』（昭和音楽大学、2005）

〔論文〕

『オペラ公演からみた地域文化政策の一考察』

『日本の劇場運営におけるオペラ制作の課題』（共同論文）

『北九州市圏域の潜在的舞台観客層に対する効果的なマーケティング手法の開発』（共同論文）

『日本におけるオペラ公演の観客形成の一考察 —メディアとオペラ観客—』

プロフィール

岡本 和子（おかもと かずこ）

通訳・翻訳、ライター、音楽プロデューサー。

4歳～8歳までフランス（パリ）、8歳～高校卒業までオーストリア（ウィーン）で育つ。ウィーンの独仏バイリンガル・スクールを卒業、仏バカロレア（フランスの大学入学資格）取得後帰国。慶應義塾大学美学美術史学科（音楽学）卒業、東京大学大学院ドイツ語独文学科修士課程修了。

NHK衛星放送開局当初より独・仏定時ニュースの同時通訳を行うと同時に、NHK ニュース、TBS「ニュース23」、TV朝日「ニュースステーション」などで20年ちかく通訳・字幕翻訳を手がけている。各種国際会議、見本市、スポーツ・イベント会見などの会議通訳もあわせて務める。

また、NHK-FMの音楽番組や雑誌のインタビュアー、キャスター、ライターとしても活躍。オーストリア放送協会 ORF のクラシック長老番組「パスティッチョ」にゲスト・コメンテーターとして出演するほか、同国ロータリー・クラブ主催の音楽愛好家の会では日本における西洋音楽の歴史について講演。

CD解説文の翻訳、英・独・仏語の歌曲やオペラの翻訳・字幕も多数手がける。通訳、あるいはインタビューを行ったアーティストの数は100人を超える。

現在、慶應義塾大学非常勤講師、多摩カルチャーセンター音楽講座講師、オーストリア国リンツ市ブルックナーハウス芸術顧問。

訳・共訳にて『ドイツ統一までの365日』（NHK出版）、『ウィーン・オペラ』（リプロポート出版）、『ウィーン 芸術と社会』（岩波出版）、『ドヴォルザーク』（音楽之友社）、『さすらい人ブレンデル』（音楽之友社）他。

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」

シンポジウム
オペラ劇場運営の現在・オーストリアⅡ
オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方
～ブレゲンツ音楽祭にみる大規模オペラ・フェスティバル運営

講義録

2007年3月13日発行

昭和音楽大学オペラ研究所

〒243-8521 神奈川県厚木市関口 808

tel: 046-245-1055 fax: 046-245-4400

e-mail: opera@tosei-showa-music.ac.jp <http://www.tosei-showa-music.ac.jp/orc/>

©昭和音楽大学 禁複製・無断転載 非売品

